

繪本
增補

玉葉前曦袂

三三三
佳
十
六
河
一
四
三
佳
子
田
植
桂

繪藏堂樓

繪本 玉藻前 曉杖 増補

浪岡 橋平

作者 淺田 一鳥

安田 蛙桂

第壹天竺沙牟呂山の段

清^{すめ}るの登^{のぼり}て天^{あめ}と成^な濁^たるの下^{くだ}りて土^{つち}と成^な其開闢^{そのかいびやく}の日^ひの本^{もと}や唐^{たう}土^と天竺^{てんぢく}か
りなき、靈氣^{れいき}のこりて人と成^な陰氣^{いんき}かたまる惡獸^{あくじう}有^あ、八百億^{やく}五万三千七
百六十^{ちろしよ}餘歲^{よさい}を經^へし、金毛^{きんもう}九尾^{きうび}の老狐^{らうこ}よて、天竺^{てんぢく}唐^{たう}土^と日本^{にっぽん}よ渡^{わた}り、人民^{じんみん}を
あやませし、其往^{いふ}古^この南閻浮提^{なんえんぶだい}、南天竺^{なんてんぢく}の天羅國^{てんらこく}、班足大王^{はんそくたいわう}よ屬^{ぞく}しぬる、淨^{じじやう}
波璃^{はり}國^{こく}と聞^きへし、普明長者^{ふめいちやうじゃ}が領地^{りやうち}よて國^{こく}も豊^{ゆたか}よ富榮^{ふみさか}、多羅葉^{たろは}菩提樹^{ぼだいじゆ}赤
梅^{せんだん}檀^{たん}木^きよ生^{おひ}茂^{しげ}る沙牟呂山^{しゃむろさん}、麓^{ふもと}よ住^{すめ}る農夫^{のうふ}有^あ馬忠子^{ばちうし}といふ正直者^{しやうじき}、不慮^{ふりよ}の
事^{こと}よて妻^{つま}を失^{うしな}ひ筐^{かたみ}の品^{しな}を携^{たづな}へ、山路^{さんじゆ}深くも迷^{まよ}ひ入^い、此女房^{このにようばう}の何所^{なにか}よ居

る事じや、たとへ人間でかいとても、今一度あふてとつくりと暇乞一禮
 もいひたし、此國の殿様にお慈悲深ふて、殺生するが法度あれば、此山
 中が鳥獸の集る所、爰も居よかと尋て來たが、とふぞ逢たいくとさ
 まよひ行も心の闇雲をわけてぞたどり行、乾の方へ供人引つれ、當國亭
 那臺の城主普明長者まづくと出來れば、馬忠子かたへまひさまづき
 憚りあがら殿様と見受お願ひの一通、お聞届け下さるべしと、恐れ入て
 ぞ願ひける、長者とつくと打ち詠め、願ひの筋と有からり、様子よよつて
 聞届けて得さすべし、子細やせと有ければ、是れ有がたい殿様のほ
 仰、私めの沙牟呂の山陰に住する馬忠子とや貧しい土民、米の八汐よ
 一ばい買薪の伽羅や眞那盤も朝夕煙を立兼て、一人の母者人も養ひ兼
 ました、が、有時交地の兜論が嶽の麓を通つた時、思ひも寄ぬ鶴一羽空か
 ら落ましたを、とらへて見れば、矢が一筋立て有てつさり獵人が射そん

じた物で有と、矢を抜てやりましたたら嬉しうふ又飛去ました、内へ歸つて其翌日、一人の女が女房としてくれいといふて參つて、母の介抱怠りなく、貧乏な世帯を見兼てすまそるに、鶴裳と言絹を織て進せふ、是をお上へさし上たら、千兩の金もある物と、せまい内に一間をえつらい必爰を見やえやるかと、一人這入て機を織、ちよつざりこつざり其音の面白さ、有時私がとんな物えやちようど見よふと、透間から覗ひて見たら其女房が鶴と變じ、羽をふるへば雪どちる其毛を集めて絹又織、是はふし義と一間の襖明れば、忽唯鶴の雲井遙又飛去し、跡又残つた此鶴裳是を筐と取持て女が行衛を尋まする、もしや御用又立さらばお求なされて下されど、涙ながら又取出せば、珍しき鶴の毛衣、ふしぎの業を見る事よと感じ、入てぞおいします折から山谷震動して吹來る魔風砂石を飛し稍吹折音すさまじく、あいやと見やる其中、件の絹を吹上て虚空

よこそい飛びちつたり、馬忠子見るより南無三寶、妻が筐かたみの大事の織物
いづく迄もといつさんよ雲を、目當よ追かけ行く、長者もふしんの眉まゆを
ひそめ、心得がたき今の魔風、子細ぞあらん見屈みじりん、者ども來れど引連て、
かしこへこそい「またひ行

同麓の段

沙牟呂しむろ山の山蔭かげの草ぼうくと生茂おひしり、いと物凄すこきあれ野ばら、また一
まきり吹風ふかぜよ、つれてかゞやく陰火いんくわの光ひかりきらめき渡る其中うちよ、顯あらわれ
出る其形かたち、二八斗にやうとの女の姿、錦繡きんしうを身みよまどひ、上うへよあけたる鶴の毛衣、玉
を欺あそむ粧まひり、和國わこくの櫻海棠さくらあひばう、眠ねむれる如ごとき有様ありさまよて、我わが天地開闢かひびやく、此土こゝ
よ生しやうを受うたる狐魔界きつまかいよなさんどかもふ所ところよ、南天竺なんてんぢく摩迦多國まかたこく、淨梵大王じゆつぼんたいわう
が一子しつた悉多太子しつたたいし、檀特山だんてくせんよて佛法ぶつぽうを執行しゆぎやうし、三國さんこくよ是こゝを弘ひろめ、我わが魔道まどうをさ
またげあす、然しかるよ今いま此鷓鴣くわくしやう裳手しやうてよ入上いりあがり、是こゝを着ちやくして國王こくわうの姫ひめと偽いつはり、班はん

足王が夫人と成、かれ又すゝめて佛法を破却させ、魔界となさん、案の内、あら面白や嬉しやと、笑をふくみし眼尻に、誠は傾城傾國の輝媚たる粧ひも、まづ一歩む後の方、窺ひ聞たる普明長者、腰は帯せし獅子王の、劔を拔ば震動し、美女の容に忽ち書消、如く失ふけり、普明のあたりをきつと見て、安からざりし國家の大事、聞取たるも劔の威徳、魔道をやぶるも我方寸と鞘も、納めし胸の内、曇らぬ鏡淨はりのていや、臺へと、行空や

蘭亭宮の段

般若波羅密普門品陀羅尼眞言稱名の法の聲を喧し、南天竺の天羅國班足王が都の構へ、蘭亭耶の樓も、寄つとひたる官女共、林如呂婦、此天竺の暖で秋冬まらぬお庭の詠め、伽羅たがやさんの花盛り、蛇我垂八沙の質も出来る、見事お事じやあいかいの、あんなら女のいやる通り、お花畠の牡丹蓮花まんまゆまやけ迄花が咲、麒麟閣や娑角天山も鳳凰孔雀

迦陵頻が囀る聲を聞時、外へ出たいた氣にとんとない、それ又大王様
花陽夫人様といふお后がお出なされて、皇后の采姫夫人様のおいとし
いじやあいかいの、花陽様の御殿へ這入誥て、數多の天人を集めて、舞子
よして鑑よやう鉢で大騒ぎ御酒宴の肴より人魚のさし身蛇の鮓じや
の、狸のかべ焼でも、何でもあきたが望次第結構な身じや有まいか、され
ぱいのそふしてゐの花陽様、うつくしい顔、似合ぬ、弓射る事が大お
上手、それ故大王様と連立て毎日、の野山獲、殺生するがお好といふ
、え、いつたくせが有物じや、サ、それよ引かへ采姫様、お慈悲深ふて信心
者、大王様へ願ふて千人の坊様達を呼で、佛事供養有がたそふな事で有
たよ、花陽様のお差圖で、こちらが様なうつくし者をけんたんの様よ身
じまひさせ酒や肴を運して、色で仕かけて墮落させ、それを科よ坊様達、
獅子の餌食喰した、いぢらししいじやないかいの、そりやそふ思やる筈

の事、わがみも其時坊様はんも、喰くじたのじや有ふがの、何のまゐそん事、ま
たが日本での坊様の女房も成と大黒といふげなが、天竺での何といふ
ぞいの、さればそあたの顔付、ほうのふくれたおた福神、辨才べんざい天共いをか
いのふと、どつと笑ふの異國いこくでも、糠ぬかの崩くづる、病やまひなし、實じつ諺ことわざも人事じんじの、もれ
てかしてに、聞へけん、錦にしきの帳とじりをまぼらせて奥の殿を采姫夫人、羅綾らりやうの袂たもと
かき合せまとやかま出給でひ、女子共あれまて聞はしたさい花陽夫
人の噂うはさ我君のお耳も入いり、自がいのすかど、おさげしきも耻はかしい、必沙
汰を仕しやんなや、そあた衆も知通り花陽夫人のさかしら言、佛道を信しんず
る輩ともがらの、悉多太子も一味して、謀叛むはんと云立百ヶ國の王達を悉く擒とりこどさし
一ツ所も押込おしこめて、あのおの如く同音も、法ほふ經讀誦唱名の聲を聞きくも怒いかり
近い内うちの首を討、花陽夫人を慰なぐさめんと、無理非道あるは仕置しき、いかなる
天魔てんまの見入みいりぞや、淺ましのは心と世を恨うらむは歎なげ、お道理様やと、林りん如じよ呂

婦、案陀羅たらと俱涙飯經脚布の袖袂、すゝり上るぞ殊勝あり、折からば
門さしめきて、樂を奏する管弦の音、あれ我君の早還御、皆出迎やどのた
まへへ、はつどいらへて官女達階近く立出て還御、今やと恐れ入、待間程
なく庭上へ、大王の威を輝し、瓔珞かけし絹笠を官人よさしかけさせ、印
子の、天冠蛇形の衣跡、又引出す大象の脊の屋形を輿車、花陽夫人を乗
奉り、警固の、穩風逼比留大臣、都阿鼻の侍、車加多羅梵、其外官人隨へて、
獵の場所へ還は有、常の御座へ入給へば、采姫夫人のえとやかよ、今日の
れ早いば還は、さぞお勞どのた給へば、大王機嫌うるのしく、何のく花
陽夫人を慰めんと毎日く遊參山獵、此程に彼普明長者が領分、さやつ
の慈悲心深く殺生を禁ずる故、禽獸多く集ると聞、淨破璃國を獵せし、所
思ひの外、又大きき得物、麒麟唐獅子一角、鳳凰孔雀、陀鳥さん、と椽との
鳥獸、花陽夫人が懸香の料として麝香猫を狩出せし、すつきり狝狝の贖

物斗いらぬ殺生した事じや、又明日から流砂川の川狩り鯉鮒鱸鱒なん
ど氣をかへて樂しまんど、聞もうるさき采姫夫人、大王の傍りすみ寄す
も恐れ有ながら此天竺の佛の國佛法を立て政を納め無常を去めす國
の風、君も信心有けるがいつの比々花陽殿又すしめられ、佛を嫌ひ殺生
を好み、罪なき者を害し給ふ其恨の積りあへ終りぬ此國亡び失來世の
必、無間地獄に落給はん、御心を入かへ花陽殿を退けて、身身を全ふさし
給へど、涙と俱りかきくどき、夫を思ひ世を思ふ、貞女の道の唐倭天竺迎
もかいらざる、操の程こそ有がたき、奥の内々花陽夫人、采姫が諫をど
つくど聞、官人又助られ、まづくかり立傍近く、面又怒りの色を顯ひし
最寄よりわれきて聞べ、事おかしき后のお詞、そふおつしやる佛法程、國
又害有物のあし、釋迦といふの摩訶多國淨梵王の一子きて、佛法執行
と偽り、靈鷲山よかたらひ、謀叛を工む謀、そりやそなたのさかしら言

勿^{もつ}躰^{たひ}亦^{また}くも釋^{しやく}尊^{そん}の王位^{わうゐ}を捨^{さい}妻^{さい}子^しを捨^{さい}寶^{ほう}をなげうつ生佛^{せいふつ}、それをさみするそあたりの外道^{げだう}、イヤもじこそ謀叛^{むはん}の荷膽人^{かたぢひと}、イヤそなたが、イヤそもじがど互^{あひ}よつものめ争^{あらし}ひよ、大王^{たいわう}大きに怒^{いか}らせ給^{たま}ひ、イヤにつくき采姫^{さいぎめ}が諫言^{かんげん}立^たと引立^{ひきた}よと倫言^{りんげん}よ、大臣^{だいじん}官女^{くわんぬ}押濟^{おしげ}、双方^{ふたう}あだむる折^せしも有^あ、普明^{ふめい}長者^{ぢやうぢや}案内^{ない}と呼^よめる聲^{こゑ}よ班足^{はんそく}大王^{たいわう}、それ待^{まち}かねし普明^{ふめい}長者^{ぢやうぢや}、必^{かならず}ぬかるな者^{もの}共^{ども}と、下知^{かじ}よ隨^{したが}ひ官人^{くわんにん}共^{ども}、參内^{さんない}今^{いま}やと待^{まち}もふけ心を「くぱりひかへ居^ゐる、程^{ほど}あく階^{かゐ}下^かよ入^い來^きる、亭^{てい}那^な臺^{たい}の城主^{じやうしゆ}普明^{ふめい}長者^{ぢやうぢや}、仁義^{にぎぎ}を守る正直^{せいぢく}の頭^{かぶ}よいたく輪巾^{りんきん}よ、衣服^{いふく}の花^{はな}美^びの好^{この}まねと、自然^{しぜん}と顯^{あら}のす優美^{ゆうび}の骨柄^{こつがら}、大王^{たいわう}眼^{がん}下^かよ見^み下^{くだ}し給^{たま}ひいかよ普明^{ふめい}、汝^{なんぢ}我^{われ}屬國^{ぞくこく}を領^{りやう}しながら、悉^{しつ}多^た太子^{たいし}よ心を合せ、此^{こゝ}天羅國^{てんらこく}を領^{りやう}けんと謀^{はか}る趣^{おも}、班足^{はんそく}とくより悟^{さと}り知^し、政事^{せいじ}を談^{だん}するど偽^{いつはり}り招^{まね}き寄^よし、事の實^{じつ}否^ひを糺^{たゞ}さん爲^な、返答^{へんたう}有^あやと、居^い尺^{たけ}高^{たか}、普明^{ふめい}ちつ共^{とも}恐^{おそ}れず、思^{おも}ひがけなきは詞^{ことば}、我國^{わがくに}數代^{すうだい}君^{きみ}よ屬^{ぞく}し、いかでか謀叛^{むはん}なすべきや、は身^み此^{こゝ}程^{ほど}よ花

陽を宮中みやうちうに招き入、后きさき方かたに打捨かれが詞ことばも付、百ヶ國の王を擒とらとなし佛道ぶつだうを忌嫌いみきらひ、千人の僧をとり入へ柵しがらみの内うちに追込おしこみ獅子ししをもつて噬殺かみころさせ、罪つみなき者を斬害がし、鳥獸けだものも及ぶ迄命いのちを斷事たつを好給ふ、某たれとくを見聞しゆへ、一命をなげ打ては諫言かんげんをなさん爲、恐れず參内致したり、かゝる悪行を重ね佛國の王といひんや、何とぞ心こころを本心ほんしんにかへし給ひれ、あをぞ願ねがひくは花陽はなやうを退殺生しりぞけせつしやうを捨慈悲じひを心得國家こくがを治め、太平たいへいの基もととなし給ふべしと涙なみだを流し諫いさめける、采姫夫人さいけふじんも力を得て、今の長者ちやうじやうの諫言かんげんを、道理だうりと思し召めあらば、心こころを和らげて佛ぶつを信しんじ給ひれと、君を思ひの貞節ていせつも、花陽はなやうの怒いかりの顔色かほいろかひり、后ごうといひ普明ふめいが詞ことば、兩人互たがひも心こころを合あひ、君を佛道ぶつだうも落し入國らくしにこくを奪うばひん謀はかりごと、必かならず油斷仕給ふあぶらきりなと、飽迄あちすゝむる佞ねい肝邪智かんじやち、こらへぬ普明ふめい々つとせき上あ、又またつくき嬖婦いんぶが其一言いちごん、だまれやつとぬめ付る、威い有あて猛たけき眼まなこの光り、大將たいしやう憤怒ふんぬの相さうをあらひし、だまれ長者ちやうじやう、朕ちん同然どうぜんの

花陽さうごんは雜言ざごん重ねく、慮外りよぐわいの汝、我目通りわがめどおりの相叶あひまのぬ、く者共彼かれを獄屋ごくやへ引立ひきだよ早くくと下知したすれば、はつとこたへて官人くわんにん共鋒ほう先揃まづそろへ立出たて、普明ふめい立やれど罵ののれば、かんらからと打笑うちわらひ、ア小こさかしき下官原げくわんげん、君きみも諫言かんげん仕拔しはく迄いた、此御殿このごてんの動うごかぬ某たれ、手向てむかひあさば手ての見せぬ、獄屋ごくや杯なむどの事ことおかし、案内あんないせよと先ま立、恐れぬ勇ゆうとまどのぬ智者ちやう取かこまれて入いり、大おほ王おう重ねてこりや采姫さいき、朕ちんが數年すうねんの恩義おんぎを忘れ、普明ふめい長者ちやうと心を合せ、此一城このいちじやうを傾かたむけんと謀はかし、段奇怪だんきがい至極さいごく、其罪科そのざいこより兼かて聞及きかぶ、花陽さうごんが手並たなびの弓矢きうしやをもつて汝なんぢが兩眼りやうがん耳口じくを的まととして、射藝しやげいの程ほどを弑ころんと、惡逆あくさく不道ふたうの偏言へんげんを、采姫夫人さいきふじんの恨うらまひげよ、曲まがもあ、我君わがきみの仰おほ、さらく、悒氣いつき妬ひなみあらず、忠臣しゆぢんの諫しんを用もちひず、非義ひぎ非道ひたうの思おもひ召まひ、人の恨うらみの積つみ、御身ごみの大事だいじと成なやせん、情なさけなのお心こころと、其身そのみおしまぬ夫おと思おもひ、ことわりせめてあられなり、班足はんそくいかりの大音上おほねんじやう、詞ことばをかへすよつつき女むすめ、逼ひつ比留びりうき

やつを奥庭へ引立、樹木のもどよなぎ置、はつと斗ふ逼比留大臣いた
りしあがら引立し、地獄と繪書牛頭馬頭の呵責もかくやとえられけ
る、かゝる折しも城外と勝鬨あぐる金鼓の音、大將あひやと見給ふ所と
蛇形の大旗、數多の鉢先、討取首をつらぬき、追かけ入諸軍勢、まづ
さきと於彌加羅品、主君の前とつゝえんで、されば此度仰を請、摩迦多國
と向ひし所、釋迦と一味の五百羅漢、其外數万の佛者共、百里四面の釋迦
堂と立こもり、軒と三筋の通り町八日市まで砦をかまへ、事嚴重と見へ
たれば、力せめよの叶ひじと彼天笠の横町から、ふ意を打てせめ入、茶
良六昆逼得權、劔をふつて切て出爰をせんとし、戦しが、甘余王が首討取
只今凱陣仕ると息つきあへず、訴ふれば、大將大さきと喜悅有て、適
汝がはたらき、恩賞沙汰の追ての事、此上の橋とあし置たる百王共が首
をはねさせ、花陽が心あぐさめん、夫人來れと手を引て別殿、さして入た

まへ、諸軍もれのくいさみ立ち、凱歌をおさめしづく、と陣所へこ
そは、別れ入、蘭亭宮の南面、樹木しげれる築山の、下、ぼたんの花ざか
り、しぼむ姿の采姫女、きのふまで、金殿の臺の上、かじづかれ、今、素
足と白砂も無實の罪、身を沈め、見る目いぶせ、さしはり繩、官人共、引
立られしはく、として出給ふ、情用捨もあら、けなく庭木のもどよか
らめ置、我君の仰花陽様のお差圖なれば、是非があい、笑止な事といひ
捨て、かしてここにこそ、いあゆみゆく、跡、采姫、つながれし、繩目のかづら
打えほれ、最期を待間のはかあさり、今、此世の名残り、口、念佛をと
あへし、いあわれ、なりける次第あり、靈明殿の樓、班足王を慰、樂を
奏する、笛の音や、琵琶のえらべのおもしろき、喜怒愛樂のさま、又、爰
ぞ生死のさかいとて、百王達、獄屋の内、來世を願ふ、經文をとあふる聲
のかまびすし、こなたもやうく、涙をはらひ、樓、音樂の最中、笛太

鼓の聞納め、アほんと思へば此身程、因果赤者が世も有か、社達王の娘と
うまれ、天羅國の后とあり、月の遊や花の宴君と諸共たのしみて、夜の
ふすまのむつごとと水も洩さぬえしをば、月もむらくも花も風いつ
しのかゝる一人寐よ、こがる胸もおしえづめねたみ心の赤きものを
年月赤じみし我君が妾が命を斷よとい、わんまりむごい胸欲な、聞へま
せぬとすらみわび、身をもだゆればちる花の、空もえられぬ雲見ぐさ、む
らさめえきる血の赤みださへ入ばかりも泣えづむ、早刑罰の刻限と官
人ども用意を赤し、鋒短劍をぬきもつて、庭上も居ならべ、大王さき
も花陽夫人、弓と矢たづさへ立出て、いやのふ采姫どのに身つねくみ
づからをよくみたる、うらみの一矢思ひ知りや、其方をえりぞけよと
いふたる口、咽の穴から射てえまへ、いへくろれよりの佛の道、聞込だ耳の
穴いづれが先も射通さんど、あさける詞も顔を上、どうよく赤事か

たりん氣妬ねたみの有ならひ、おられもない姫ごぜの弓矢の道の心見よ、的まとよ
せんとい何事ぞ、うらめしい心やと歎く涙よ下官共、はいたいしやと斗
まて、俱に心をえほれける、花陽ねたみの妬恨ねたみの一矢ねらひすませし向ふより
さつと吹來る風よつれ、共たけ丈余じやうよの大の獅子、眞一文字よ飛來る、遠まづかの
花陽も恐れをちしは殿をさして逃入のがれバ官人共み只うろく、獅子みの采
姫のいましめ囓切かみ、よみこしとふと引くみへ、林の中よかけ入たり、大王
大きよ怒いかりをちし、合点あての行ぬあみの獅子み、いづくより入たるみ、アみく者
共み生取いけはつとこたへて下官共みいみく、鉾ほこ鉾けん太鼓かね上たこを下へと、騒さわぎ
けり、夫人みを助け廣庭ひろをいみつさんよ走りきて、谷やよかけたる、石橋いしの半なよ
立たる件くだんの獅子み、文珠もんじゆ淨土じゆの石橋いしも、斯かくやと斗たいさまし、官人み皆みなく鉾ほこ手て鉦かね
棒割ぼう竹たけよて追廻おせみバ、飛付とく、囓切かみれあつと叫こびてたをれ伏ふか深手ふかを負お
て逃にるも有算うんを乱みだせし有様みあり、班足はん大王お飛とで出い、アみ小こさかしき畜生ちくしやうめ、

手捕とらふせんと追廻おひまわる、花陽夫人はなやうふじんの樓たかより王わうの働はたらき獅子ししのふるまい、目めば
なしもせず見物けんぶつす、大王だいわうの大手おほてをひろげ、むんずと組くめばふりはあし、む
かふてくるを左右さやうよかひし、難がたなく足下あしもと又また踏ふ付かれ、あやしや震動しんどう稻光いなひか
り、獅子ししのかたちかたちきへ失うて、劔けんと變へんじかたへある樹木じゆもくの枝えだもとゞまり
ける、始終しじうの様よう子を花陽夫人はなやうふじん、窺うかがひ見たるこゝた々た、我君わがきみ驚おどき給たまふな其
子細しさいや上うんと、采姫さいき后ごうを伴ともひて、まづく出る普明ふめい長者ちやう今の獅子ししこそ某それがこ
が家いへ又また傳つたへる獅子王ししわうとや名劔めいけん寶たからの徳とくよよつて、ア、姪婦いんぶが正躰せいたいを、只今ただいま
顯あらひしに覽み入いれんと、劔けんを取とりて拔放はなせ、あつと一聲いっせい大きおほきよ叫さけび、丹花たんくわの
唇耳くちびる迄いたり、九くツの尾おしを振立ふりたし、狐きつねのかたち忽たちまち東ひがしの空そらへ飛去とびたり、レ見
給たまひしに大將だいしやういつぞや我本國わがほんこくよて出合いひあやしのもの、正ただしくかれ
ど我黒星わがくろほし、后ごうと變へんせし姪婦いんぶの亡失はろびたり、我君わがきみ百王ひやくわう方を助たすけ佛ぶつを信しんじ給たまふ
かと、忠義ちゆうぎの詞ことば又また班足はんそく王わう、誤あやつたり、天羅國てんらかの主しゆながら、老狐らうことま

らすきやつが心又惑まどひされ、其方が忠義采姫が貞節ていせつ諫いさめの詞を用ひずして、百王を害がいせんとせしわが誤あやまり、剩あまつさへ罪つみなき千人の僧侶そうりよ迄、惡獸あくじゆの爲ため失うしなひし佛の御罰びち請こんの恐おそれ、今より釋尊しやくそんのおしへを受、佛の道みち入いべしど、惡あく又つよきの善道ぜんどう又かしてき智惠ちゑの文珠もんじゆの導みちびき、さとり給たまひし大將たいしやうの、實げ一城じやうの御ごあるじ、普明長者ふめいぢやうもいさみをあし、あつばれ、君釋門しやくもん又入いたまひ、臣本國しんほんこく又立歸たてかへり、南天竺なんてんぢゆを守護しゆごなさん后ごの宮中みやうちゆう立給たへどすすめる詞ことば又采姫さいきの方かた、君きみ又名殘なごりのおしどりの、狩かり又どらるゝわらひが命いのち、ふしぎの奇瑞きさい又助たすかりしも、これ皆御劔ごけんの御德ごとくとよろこぶも又わかれのなみだ、せめてまべしと引ひどむるを、其手そのてをはらつて御大將ごたいしやう、鷲じゆのお山やまと淨じやうはりへわかれ、別わかるゝ法のりの道みち、衆生しゆじやうをてらす月の國代つきのかくに又、さかへど、有ありたき

是方唐土
第二

姐己入内の段

夢まだ見ぬ唐土の末廣く千里の原も廣くと錦織なす道野邊の草踏
分て數多の官人、綺羅を銚しは、螿恩州の津まさしかられ、警固の役人
下部又向ひ、此度主人、冀國公、紂王の仰よよつて、姫君姐己を入内の道筋、
此行先、董貞郡、暫く是みて休息せよと、指圖は隨ひ車をどいめ、暫し
息をつぎ居たる、時しも一天かき雲り、車軸を流すは、やち風、空は稻妻は
たゝがみ、恐れおのゝく、雜人原、狼狽騒ぐ其隙、いづかか、年経る野
干真、一文字、かけ來り、車の内へ入よと見へし、あつと叫ぶ、女の聲、妖
魔の見入を恐ろしき、警固、何の氣も付ず、下部を制して、者共、太切
る、姫君、過ち有て、言譯あし、早旅宿へも程近ければ、急げく、の下知
又連又轟かす、小車の音も深山、又、俯して、樹木をさらす、追風や道を、早め
て

大公望漁の段

曲る世も曲らぬ針も、己が儘心も清き水上の蟠溪谷の岸口も、容貌活面
異相の老人、石上も座をまめて、うきふし込し釣竿も好める道の一釣竿、餘
念の更も、見へざりき濱風も、通ふ千鳥の聲あらで、芦かき分て西伯文王
雷震一人引連て渭水の岸も立休らひ、く漁人物問ん、此蟠溪の草爐の
中も、呂尙といへる人有べ敷てたべと有けれ共、只一心も釣竿も、悠くた
る頭をもたげ、夫乾坤の大極より發つて宇宙を生老、湯王廿八代の主般
の紂王、聰明叡智の明主ありしに、姐己が色も心亂れ、忠臣義士を追失ひ
民百姓を斬害して、國正も亡びんとする我陰國の乱を辟、只雲水も心を
澄し、世の塵埃を斷し身も、ハテ思ひしき問答やと、さも不興げもよもな
き雷震の聲あらしげ、推參なる耆め、此方方を誰どか思ふ、忝も西伯迎
西國の奥大名、心も望有べこそ馬車も召れずして、此海邊を吟ひ給ふ
よ、土邊もすさつてかつつくばい三拜の、ひろがらで、出るまゝの雜言過

言、雲雀骨をめぐつきくへし折て、くれんずど、勢ひかゝるをはつたとね
め付、尾籠之雷震、賢者も向ふて不禮至極すさりおらふど呵り付、禮義
正しく文王の漁人も向ひ頭を下、誠や名玉の光を覆ふど、天をたてよ
し地を緯よする才有て、百万の強敵も掌も取ひし々大公望と見しひ
が目か、足下の今の一言もて明德爰も顯られたり、我こそ岐州西伯なり
何卒貴君我國も來り仁義五常を垂給ひ又一つよの四方の異敵を退け
國泰平の基ひと成教を示し下さらば此上もいはず、偏も頼み奉ると身
を謙り詞を崇め、真砂も額を摺付く、君子をあづくる良將の、其功し不
類ひなき様子を見聞血氣の雷震、思はず玄ら高笑ひ、鷄を裂よ牛
の刀を用ゆるとやら、死損ひの白髮親仁も叮嚀過た御挨拶、最前から見
ておれ、釣針を曲もせず餌もさしず魚を釣ど、此廣い唐土も今
一人どない大たのけど、嘲る詞耳ももかけず、一心不乱よこなたの漁人

慥しやう又手てをたへ釣上つりあしり、尺余しやくよ又餘る白魚しやうぎよの勢いきまひ、鞅あきれる雷震らいじん文王ぶんわうも奇意きいひの思おもひをあし玉ふ、漁人りしやうの白魚しやうぎよを兩手りやうて又さしげ、今いま若者わかしやうが難がたせしごとく、魚鱸ぎよぶろの類たぐひを釣つり又また有あり、只玉公ただたまこうを釣つりんとする、時成ときなりかあ今日けふ只今ただいま文王ぶんわう我われを招まねき玉ふ、折をりしも釣得つりえし此白魚こゝろしやうぎよの、我われを辱のみぢく天あまの賜たまひへ、有ありがたし、と、魚いしを海獺あまじろ又取納とりのりめ、文王ぶんわうの前まへ又謹つとんで、某なつか不才ふさい成なりといへ共天ともあまの助たすくる名な君きみ又仕つかへ、草爐そうろを三度さんた願ねがふ、大恩おほい報はうせせり有ありべからず、紂王しゆうわう猥みだり又人ひとを損そとひ百性ひやくせい塗炭とたん又落おちたり、今いま君きみと心こゝろを合せ御代ごだい泰平たいへい又あさん事こと、我方わがはた寸すんの内うち又また有あり少しも氣遣きぢひし玉ふなど、詞ことばすゞしく老眼らうがんの瞳ひとまも威い有ありて猛たけからず、般いんの姐あね已すでに亡なほせし、實周室じつしゆうしつの大元師おほいもとと美名みいの代々かたがた又芳かほしき、文王ぶんわう悦喜えつぎの面色おほしほ又また、頼たのむし、足下あしげを得えたるの潜龍せんりゆうの淵ふち又出いでたる悦えつびぞや、我領内わがりやううちへ程ほど近ちかければ是こゝ直ただ又同道どうだうせん、雷震らいじん輿車いしぐるまの用意よういせよ、早はやく早くと有ありければ、大公望おほいこうぼう暫しばしと、とめ、某齒よほひ八十やそひ又余あまりて、無益むやくの殺生せつしやう

何かせん、君の開運時至らば再び奇瑞を顯ひせよと、以前の白魚を海中
に放せば、尾をふり、鱗をふり八重の沙路を遊ぎ行、こあたりに主従水魚の
因、勇有雷震仁ある西伯、浪のひききや真砂地を打連てこそ、歸りける

紂王御殿の段

形山の鼠虫金器の内は横行すれば、玉石俱に亡ぶとかや、いたひべし般
の紂王、皇妃妲己が色香に迷ひ、日夜よつものる觀樂に、罪なき者を無成敗
士壇の拵へ首溜り、堀かへす代ぞ是非もあき、手で鋤下官共、一ツ所
に寄こどり、丹ほつとふ思やる、妲己様がおぼつてから、王様のお心
がめつきりと荒く成、歴々の他家來衆、比干様や箕子様始、めつたやたら
なぶち殺し、胴がらぬ魚の餌食に成かして、蓮池の血の池、今も今迎
の門へ出りや、料理をらるゝ百姓共が、何がいやが上り重り合、彼泥龜屋
同前其下への這入、其下へのくゞり、の門の内へ這入まいとするいぢら

しよ、ほんも目も當らるも事じやあいのいの、マ其泥龜突すつわんつきのといへば、
意地わるの飛仲間、つら頼付なら根性ねじやうあら、悉皆鬼じや、ア、コリヤめつた事いふ
あ、あれく、あそこへ出て來たぞ、鬼のこぬ間せんそく又洗足せんそくせふ、ぶおんく、と
下官共、お次へこそい送て入、折しも妻戸押明て、高祿太夫飛仲官、出頭しやうとうの
鼻高く、と、は階はしの元又歩み來る、檢非違使けんびゐしの官人罷り出、今日けふの罪人の
洛陽らくやうの百姓共、早先達て使しの廳てうへほづ込置、いかゞ斗たうひやさんやと窺うかがへ
ば、マ成程く、見分みぶんの某が役目、早く是へ引立來れ、はつと官人かしこよ
向まうひ、マ洛陽の百姓めらと、殘らず是への聲こゑ又連、切戸の外とち役人又擲た
き立られせいや、泣なみも詫わも聞きべこそ、皆みな庭にわ又引すゆる、飛仲官ひなつかんぞろ
りと見やり、マ百姓供ひなつかんよつく聞、今日けふの帝の御遊みゆう、御酒宴みしゆゑんのお肴さかき又御前
よおいて我達を一ひと成敗せいばい、天子のお慰なぐさみ又預ある、冥加めうが至極しごく、有難ありがたいと慨
びおらふと、聞て惣もと震ふるひ聲こゑ、マやく、帝様でも天子様でも、人の命を澤

山そらふ、酒の肴も成敗ど、余りむごいお賻欲、お情お慈悲じや拜みま
すど、皆一度に手を合せ涙と俱、泣詫る飛仲官はつたどぬめ付、ご
くも立ぬよまい言、うつ迄云ても、叶ぬ、是非がないと諦めて、念佛
の一遍も唱へおらふ、罪人めらを皆くくし上い、先あの端ををる太
り肉、油ぎつて心地よい、そやつくの聲より早く高手小手、次の瘡たる
雲雀骨、差圖も取て羽がいじめ、そやつ焼鳥重疊く、跡のこいつと立か
かる、赦されてと手を合す、物な云せそきんかん親父、驗氣よい耄め、さ
やつもくくれ、荒まこ共、有無を云せず三寸繩、まはり上たる有標の、焔
魔の廳で罪人の、呵責もあふも斯やらん、飛仲官したり顔、よいさましく
者共、最早君の還に程も有まい、繩付めらを獄へ引、はつとこたへ
て下官共情用捨もあられなく、退立られて百性共、是非なくくも大理
寺の獄屋へころい入、あけり、早還ほどど百官百司、黃羅の玉蓋さしかけ

させ、酒池の遊に三千歳もさめぬ榮花の花かづら物いふ花は誘われ
登るは殿の花清宮、設けの褥は座し給へ、飛仲官頭を下、某不才成といへ
共君の爲よ心をゆだね、笑を献じ奉らんと、思ひ付たる、酒池肉林のけふ
の遊、帝を始皇妃よも麗しきは尊顔を拜し奉り、此上もいはずと、おも
ねる詞は殷の紂王、今も始ぬ其方が計ひ、酒に愁ひの玉はさきと、汲共
盡ぬ衆の酒盛、肉の林は舜諷ふ、君が一節たまらぬ、と三千年も一度
咲、桃より希き美人草、命取めと引寄てもたれが、りし鬼あざみ、恥らふ
妾、姫百合の姐己もよつこと打ゑみて、ふつしかな自が覺ぬ舞もお笑ひ
草、只いつ迄もお見捨ぢふ、必やいのと目の内も、通はず心色ふくむ、顔も
見とれて現の紂王、飛仲官圖も乗て、是からいお后へ某が馳走も、百性
めらを一料理、く官人共やい、先達て捕へ置罪人めら、早く是へ連れ來れ
と、云つゝおりる庭先へ、こたへて官人共、早引出す以前の繩付、土壇の

前より引すゆれば、紂王はくく打ほゝゑみ、夫を肴より一献くまん、君が情の色有盃、いで賞斷と大盃、心得宮女が長柄の銚子、つゞ間遅しとぞつとほし、肴と有ければ、ばつといらへてひらめく帯劔大げさ、打放せば、いよいよ慰み、是から二つ胴脰が手の内心見よと、紅ひの裾小短くは階の元より給ひ、繩付土壇よりあも重ね、玉ちることとき寶劔を切柄はめて飛仲官、恐れ入てさし出せば、よしと尖き眼中、振上給ふと見へけるが、四つ又成て死てげり、斯と聞より司徒梅伯、恐れ並居る官人共押分く、紂王の傍近くさし寄て、どつかと座して涙をうかべ、情あや我君、皇妃姫己が色又迷ひ、婬酒の二つ又は身を忘れ、罪あき土民をば手討どり、曲もあき赤心、終りの國家の滅亡、成もやせんと歎のしく千度、百度諫れ共、一つもは許容あらばこそ、日と暮れる惡逆非道、先祖の社々よく宗廟の、は怒りのいか斗り、は心をひるがへしとくは本心よ

成給へ、改め給へと憚りなく、齒又衣着せぬ忠義の諫言、金言耳又逆立紂王、尾籠之梅伯、諫めをいるし、臣下の役と、云せて置、法外の雜言、朕を侮り寵愛の姐己をさみする不届き者、うぬも一所又劔の鈍、覺悟致せど振上給ふ、御手を姐己押と、め先にお待下さりませ、君恥しめを受ける時、臣正又死するとやら、君をわざけり自又仇名を付る不忠者、諸人への見せしめ、重き苦痛を見せ給へと、すしめ、紂王打うあづき、汝が工夫の炮焔火、是究竟の責道具、早くと有ければ下知を傳ふる飛仲官鶴の一聲、群鳥の、ひらがる、雜人奥庭より、手で引綱車臺、廻る尺余の銅筒、中もへ立焔の丸がせ、炎としてほとばしり、さもすさまじき刑科の備へ、姐己諸臣又打向ひ、此刑具、自が君をさとせし火刑の一つ、衣服をぬがせ、此丸がせを抱く時、いかなる強勢勇猛の者成共、火毒又苦しみ立所に命を失ふ、是を名付て炮焔の刑といふ、梅伯、汝三寸の

舌を以て命を果す其身の不覺と云せも立すはつたとねめ付傾國の
色をもつて君を惑ひし忠臣を殺害させ國家を亂す極悪人らぬが體を
八つ裂よと、正殿を目かげ飛かする、向ふへすつくと飛仲官、あまたの官
人追取込冠裝束引まやなぐりくるくくと丸はだか、押立く火炮
の傍、寄ぞと見へしが苦しみ叫び、虚空を掴み死したるの身の毛もよだ
つ斗あり、紂王の笑坪よ入、心地よさくたばりざま寵愛の姐己を妬み、
朕が心よ逆らふやつばら、片つはしから此通り、く飛仲官、先達て幽里
城へ押込置たる西伯め、引ずり出して拷問せよ、是よりの奥殿まで天盃
を廻らさん、皆く來れと入給へば、はつと名く警驛の袖かき合す禁闕よ
樂の響きや殺伐の聲またぐへて、かまびすし、音よ聞沈香亭と名よ高き
花麗をつくす化粧殿、裏の嘩しき花園よ今ぞ牡丹の花盛り、むれ飛蝶も
猶更よ、いと、詠めも増ぬらん、早たそがれて、木の間もる、朧月影窺ひ足、

紫山子か有ぬ一曲者、わやしと跡方付來る下官曲者までと後抱うしろたき、身をか
い沈しづんで謀かづき、又組付をふりほどきぐつと一まめ、絶入たへ死骸しかい、かして
へ蹴け飛とびし花園そのの、繁しげみよこそ隠れぬる、夫故、胸むねの千筋ちぢんの乱みだれ、苧おや、解ぬ
思おもひの錦糸きんし蓮れん、我子の錦舍きんしゃいさあひてまほれ、出たる庭にわの面おもて、遙はるかこなたよ
ぞみて、お后ごう様へ直ただよお願ねがひの筋有て、はるくくと参りし、者たそお取
次つぎといふ聲こゑの、もれ聞へてや一間いけんも、出る姐あね己おのれの楊柳ようりゆうの風かぜよあやめる其
姿すがた見るゝはつと手をつかへ、おらなく西伯文王せいひくぶんわうが妻綿糸蓮めんしれんとや者、計ら
ずも夫西伯せいひく、仇人あだのさかしら言いて、羨里城せんりじやうよ擒とらわれと成國なりくにに残りし我
くが、愛あいを重おもる此年月このとしげふ、露塵つゆちり覺へあき事を、推おしもじ遊あそばして、どふぞお
救たすし下くださりませ、錦舍きんしゃ、ちやつとお願ねがひ申まをしやいのど、云い教おしゆればいた
いけよあずお姫様ひめさま、とよ様をお歸かへしあされて下くださりませ、と廻まわらぬ舌したもか
のづから虫むしがまらする血筋ちぢんの縁えり、お慈悲じひくくと親おやと子こが、睡なだみちらす涙

の花、拂ふ方あき其風情、姐己もまほるゝ聲を上、いづれ高きも賤しきも、
夫を思ふの女の情、文王猥り又古易を起し、七年の春秋を經るからば、殷
の帝亡びんと、妄言をもつて人を欺き、謀叛の企有との風聞嘘か誠いま
らね共、そもじの切なる心を察し、帝様へ能やう又自が中上、文王が命
の助け歸さん、くれ後、大王の仰よよつて、只今糺明仕ると、聲諸共、飛
仲官、引立出る西伯の、見る目いぶせき首かせの、苦痛又絶し有様、い
としやど欠寄妻、突退、退狩人の羅網、苦しむ文王の、ゑり髮取てぐつ
どねじ付、儕先年此洛陽の守護たりし時、罪人武吉が命を助け、呂尚とい
へる漁父を始め、王城の百姓原、我領國へ引入て、殷の帝を傾けんとする
大罪人、すあをでり白状せまい、骨をひしいで云せてくれんど、勢ひかゝ
れ、なまて飛仲、文王が謀叛の企是ぞといふ證據有か、其義の、大王の
仰の重く自が詞の用ぬか、夫のくくと問詰られ、二句よぎつちり飛仲

官、顔つらふくらして扣へ居る、姐己の下部しもも文王の首かせ手かせ取捨させ、
夫婦ふうふも向ひ氣色を正し、妾めかけ深閨しんけいも生立なまて、軍學か歌道かの辨へねど、百卒ひやくそくの得
安やすくして、一將いちしやうの求めがたしと常つねく父のお物語、あつたら武士をやみく
と、責殺せめころさんも本意ほんいならねば、文王親子の一命ひとことの妾が身みよかへ命迄、夫婦
も嘸さぞやと情有じやうゑ、詞嬉しひしく錦糸蓮にしん、あつかしの我夫わがみと継つがり歎なげけ、稚子ちごも
どし様抱だて下されど、またふ妻子しよこも、不便ふべんさの浮うかぶ涙なみだを押おかくし、我在わが國
の折まからよ、讒者ざんしやの爲ためよどらりれて、危難きなんも逢あべきうらかたを思おもはず得
たるの天あまの告つげ、日月にちげつも浮雲うんあり、人ひとも不時ふじの災わざはひひ有あり、無實むじつの罪つみも落入おちこり
を、不思議ふしぎも助たすかる后のちのお情じやう、有難ありがたい忝かたじけない、そうでござんす共とも、お前の
爲ためよの命いのちの親おや、錦舍にしん、あまたへお禮れいを申しやいのど母ははが押おゆる御階おんか
の元もと、何なにのぐいんせも七つ子が、盡つす禮義れいぎも愛あいさかり、顔かほに見みどれて、し
ほらしいよい子こでり有あり、自みづかしめてや、の一人ひとりも設たげんと

朝夕祈れど甲斐もあく、あやかる爲も、爰へおじや、是のこゝ有難い今
のお詞、錦舎、あまたのお傍へ早ふ行きや、仕合せな子で有と、子も餘
念なき母親がいざあひ登る化粧殿、近ふくど招き寄、菓子を取せ
んと隠せし短劔、抜取影も稚子の、鼻様こゝいと逃出す、筋搦んで引戻せ
べ、何事とさしゆる母、脾腹を丁と霞の當椽より下へ眞逆様得たりと
飛仲どびかゝり、絶入妻を三寸繩、かたへの柱も猿繫ぎ、驚く文王息を詰
様子いかゞと猶豫ふ中辨へしらぬおさな子のこゝいと泣叫ぶを
耳ももかけず、忿然と始まかゝる、姐己が面、怒りを含む聲はげ敷、最前方
窺ひ見るに、文王表も仁義を鏝り、内も野心疑ひなし、飛仲、彼が虚
實を探るもの、此駒が腹を裂肉をわたへて西伯が、善悪邪正を心見よ、
はつと答へて玉床もあられ泣入、錦舎が手足くるくくと手ばしかく
始終を見聞、文王の爰ぞ一世の浮沈、歯をくいしばる其内も、下官も

通じ用意の道具はこぶ、庭先こたえ、息吹返そ、錦糸連二目とも見も分
ず狂氣の如く身をもたへ、あんなりじやくわいのふ、情らしう見せ
かけて、顔も似合ぬ鬼后、科もあいな子をむごたらしい殺さやあらぬ譯
あらば、母も一所も殺してど、かけ寄んよもしぱり繩、劔逆手も稚子の胸
押分て飛仲官、ぐつと突込血煙も、切るも子より見る親、此世からなる
呵責のせめ刀活紅蓮劔の山劔樹の地獄目のあたり、身も世も有れず母
親、かゝるうめ目も前生の報ひか罪か悲しやど大地へどうと伏まる
び心の、限り泣つくす哀を餘添も飛仲官、腹十文字もきりわばき、摺み出
したるどうふのしむ、傍ある器も寫し入、文王が前も誥寄て、西伯
紂王の勅諭じや謀叛であくは是、捨へ、捨へ、どさし付ればちつ共
愁ふる色目もあく、普天の下卒士の濱、王土も有ざる所もなし我賤しく
も西伯の守りとして、數代恩願を蒙る身も何しよ異心有べきや、疑ひ

をばらそ物、たどへ我子の肉たり共、紂王と玉のれば、取も直さず山海の
美味珍肴、辞退致さん様もなし、有がたしと押戴き食し玉へハ思案の
臆、くい違ふたる主従が、互又目と目見合せて、鞠れ果て見へけるが、飽迄
邪智の飛仲官、よし、此上ハ手をかへて、だいぼんの落し穴、それよく
ど一人言獄屋をさして入跡、始終の様子奥の間、窺ひ玉ふ般の紂王、
大口明て高笑ひ、傳へ聞、天竺流沙の川上、塵といへる獸住んで、水
を好んで水面に立寄共、おのが姿の移るゝ恐れ、終、濁して我子を喰ひ
其膿血、咽を潤すまづ其如く愚蒙の西伯、いかゝ命を惜め、逆、骨肉の
悴を殺され肉を喰ふ大だ、いけ、何事か仕出さん、ぶち殺すも劍の穢
れ、立去やつとねめ付給へ、姐己いあんで頭をふり、妾聞、靈山の鵬、諸
鳥をねらふて、爪を隠す、油斷、あらざる彼が心中、助けかへさば竹林、虎
を放つゝ異、只此儘、どらへ置、助命の事、追ての沙汰、何さ、

譬たとへ此場こゝにかへすとも、きやつら二人にの籠こゝろ中の鳥、四百余州を放し飼かひ、
官人共、西伯夫婦を退出せ早く、と烈はげじき綸言りんげん、夜の御殿へゆうく
と姐己を、いざあひ入給ふ其間待兼かけ出る雷震らいしん、篋ひら笠かさ脱ぬぎ、捨錦糸がいま
しめ、とく間遲かそしと死骸しがいの傍かた、かひいやと抱き付、わつと斗り、泣なまづ
む、雷震文王の前、頭をさげ、君みとらひれ給ひてより、日夜心を碎くだく我と、
紂王を亡ほろさんと大公望たいこうぼうが差圖さしづ、又隨したがひ、忍んで諸軍を都へ引入とく、是
も忍び居て、始終しじうの様子、承うりつた、天地もかへがたき大切ある若君
を、殺害せうがいさせし姐己が奸計かんけい、一ひしぎと存ぞんぜしかど、君の心をはかり兼
さし扣ひかへし、ろの無念、推量すいりやうし給へと、遺名ゐなを得し荒者あらしものも哀あはれ催もよほす有様
もや、黙もくしたる文王の、子故ここの闇やみもかきくれて、洩もる涙を押しらひ、紂王
の無道むどうもよつて四百余州の民百姓、親妻子さいしも引別れ、塗炭とたん又落入其悲
しみ、天あまもかひつて救すくはん爲、惜あはれからぬ命をかひ、碎くだが肉をきつせし時

い、恩愛不便の矢先よて、五臟六腑を貫く心地、其苦しみも四海の爲、よく死だ出かしたと口よの立派目よもるゝ、涙隠せば錦糸蓮あへさきからを抱きえめ、こんさはかない、うき目を見るとき露えらす、と、様よ逢たいとこがれ暮し泣明す、此子が心のいちらしさ、人目忍んで縁子を杖よ、柱と尋ね來て廻り逢たる甲斐もあふ、罪あき者を嗣欲な、非道の刃にかけるとい何の因果と身をもだへかこち歎けば文王も、こたへ、くし溜涙心を察し雷震も、浸す袂の雨やさめ涙の落て烏江よ春雨えさる沖津浪爰ようつすがごとくなり、雷震はつと心付、返らぬ歎きよ時移りいある夏目も斗りがたし、拙者の猶も忍び居て、大公望が寄來る時刻、手筈を合して狼煙をあげん、必走ぬかり給ふあど、勇める詞よ打うあづき、我も是より城外よて呂尙よ談じて軍の用意、無益のくり言見苦し早とく、とすゝめられ、涙と俱よ亡骸を、野邊の送りと抱き上ねぐらへ歸る友鶴

の雛ひなの冥途めいじの鳥鐘とりかねの聲こゑのみ跡あとよかくくも引別ひきわかれて予まづ出て行い、時ときしも風
よ誘さそひれて貝鐘かいかね太鼓たいこ乱調らんてうよ手てよ取ととく聞きへける程ほども有ありせず欠かる官
人にん廣庭ひろにわよ大息おほいきつぎ扱ありも西蠻せいばん岐國きこくの兵へい其勢そのせい凡およ三万余よき驍せう此洛陽らくやうを追取おり卷
無な二無な三さんよ責せ立たる、思おもひがけなき警固けいこの官軍くわんぐんうろたへ騒さわぐ其隙そのひまよ、城門じやうもん
近く責せ入いて甚おだ危あやふく見みへし早く御加勢おんかせい下くださるべしと云い捨てこそ引
かへぞ、玉座ぎよくざ玉たまだれ蹴放けはなし、ゆるぎ出いたる般はんの紂王しゆうわう、我われ王城わうじやうとも憚はばら
せ乗込のりこんとする不敵ふてき者もの、よぼつちらせと下知くだちの下した、はつと答こたへて飛仲官ひなはな
手勢てせい引ひつれかけり行い、間まもかく込入こみい寄手きしの元師げんすい、大公望たうこうぼうが其出立そのいでだて南蠻なんばん鉄てつ
の大鐘頭たうしゆづに輪巾りんきん羽扇うせんをたづさへ、諸軍しよぐんを勵はげます勇いさゝかの大音たうおん、よ紂王しゆうわう慥たしかよ聞
汝姐にょせ己おのれが愛あいよおぼれ、下萬民くだまんにんを苦しめ惡逆あくぎやくあげてかぞへがたし、其罪そのつみを
紂しゆうさん爲な西伯公せいぱくこうの命いのちよよつて、大公望たうこうぼうが向ふたり覺悟かくごく、と誥ごかくれ
ば紂王しゆうわう怒いかりの髮逆かみぎやく立たち、奇怪きくがいなるうづ虫むしめら、万乘ばんじやうの位くらゐをふむ朕ちんよ向つ

て慮外の雜言、目も物見せんと帶たる寶劔、拔間も有せず、紂王の胸板打ぬく二ツ玉得たりとまげみをかけ出る雷震、首かき切て大音上、大惡不道の殷の紂王、岐國雷震討取たりとさもいさましく呼ねれば、大公望諸軍も向ひ、紂王亡ぶる上からの妖怪姐己を討取と、下知より早く血氣の雷震金殿紫閣をかけ廻り、さしゆる官人片つばし切立く、追て行

樓門の段

や、更渡る、夜半の空、星の光もかうく、といと物、凄城外より、人馬の物音、鯨波、さもすさまじく、聞へける洛陽の高殿、すつくと立たる殷の姐己、篠つく失石を事共せず、袖をはらへば飛くる失さき、筈を返して落ちる有さま、さしもの西伯諸軍勢、責あぐんでぞ見へよける、かゝる所へ大公望跡も随ひ出来る雷震、姐己を見るより眼を光らし、紂王も惡事をすすめ、數万の人を害せし魔王、目も物見せんと飛かゝる、袖を扣へて大公

望、一かたぢらぬ多年の妖怪、其本身を顯す、終南山の雲中子が、我
よあたへし障魔の名鏡、心見んと錦の袋、紐とくくと取出し、姐己が
面よさし向へば、鏡の光りよ恐れけんそゞろ身震ひ忽ちよ、芙蓉のま
ぢり薄紅梅尺ある黒髪ふり乱し、さも苦しげなる聲音よて、我の天竺天
羅國よ生を受、數千年の齡を保つ白面の狐あり、花陽夫人と身を化して
班足王を惱ませしよ、普明長者よ妨げられ本意を達せず此土へ渡り、蘇
國の姐己が姿をかり、此唐國の人民を亡ぼさんと思ひしよ、鏡の威徳よ
身をせばめられ此儘よやみあん事、扱口惜や無念やと眼を怒らし齒を
くいしぱり、手足をもだへ苦しみしが、あつと一聲櫓よりまつ逆様よ落
ると見へしが、透さず雷震斧ふり上、首をはつしと打落せば、忽ち四面の
常闇の吹來る魔風砂を飛し、ふしぎや姐己が尸より、一條の陰氣虚空よ
登ると等しく、金毛九尾の姿をあらわし、東方さして飛去し其古へを假

名書ながきも爰こゝも、うつしてひさしけれ

是乃日本 清水寺の段 第三

禹湯うとう己こゝろを罪つみて興こゝろ榮けつす、紂ちゆう人を罪つみして身みを亡ほろす、般はんの姐だう己きが顔かほ艶えんも、周しゆうの勇ゆう將しやう雷らい震しんが打う碎くだいたる斧おのの柄えの、長ながき例たとへを今いま爰こゝも、傳つたへくして七十四代、鳥羽とろの院いんのまろし召めい、御聖ごせい徳とくぞ、いみじけれ、いで其頃そのころの永治四年卯の花月、當今とうぎんの御兄ごあに薄雲うすぐもの王子、清水參籠しみずさんろう有あべし、迎むか、地主ぢしゆのお庭まはも大幕おほまく打うせ設まけのまどねも着給きやくへば、はかたのらよ、犬淵いぬがち源藏げんざう友景ともかげ、其外そのほか近侍ぢんじやく從者じゆうしやくの面おもてく、列れつを、正ただして扣ひかへ居ゐる、皇子みこ緩ゆるくと席せきを見下みくだし、我われ當今とうぎんの兄あにといへ共日ともひ蝕しよくの生なれ故ゆゑ、弟宮ていみやうも帝位ていていを越こえられし鬱憤うつげんやむ事ことあく、何卒なんじやくして万乘ばんじやくの位くらゐを奪うばへんと、隱謀いんぼうを企くはだ、攝家せつけ清花せいゑの分わかちあく、大半たいはんの味方あじも屬しやくし、只ただ氣きぶさいあ、右大臣みぎのちじん道春みちはるめ、討取うちとんど思おもひし内うちくたばつたのもつけの幸さい誰憚たれがる者ものもあく、大望おほぞら成就じゆうじゆのまたく中なか、あらし心こゝろよや悦よろこべしやと、飽迄あき慕つ

る放逸ほういつ我慢がまん犬淵いぬぶちはつと頭あたまを下くだ先達さきだつて鷲塚じゆづか金藤次かねとうじ又仰付おほせられし通り、な
んなく道春みちはるが館やかたへ忍しのび入いらばひ取とり、差上さしありし獅子王ししわうの劔けん傳つたへ聞き天竺てんてく天
羅國ちんろく班足はんそく太子たいしの後のち花陽夫人けいようふじん、誠まことに金毛きんもう九尾きゅうびの狐きつね又また佛ぶつ法ぽうを滅めつし魔界まがいよ
せんと謀はかりし所ところ、彼か名劔なけんの威德いとくも恐おそれ唐土たうどへ飛去とりし例たとへ此劔こけんの德とくをもつ
て諸國しよこくの武士ぶしを味方あじかたよ招まねき、君きみを位ゐよ進すすめん事こと掌たなごころよいと、何なにがあふ氣きよ
犬淵いぬぶちが取とりえめもあき追從ついで、皇子みこ重おもねてヤア源藏げんざう道春みちはるが娘むすめ桂姫かづね兼かみふ心こころ
をかけ毎まい度ど催もよほせ致いたせ共とも、打捨うて置お條ぢょう奇怪きがい至極しごく、彼かが館やかたへ立越たこて得とれ心こころせず
首くび討うて立歸たてかへれと金藤次かねとうじ又また申付まをし、心得こころえたるかど烈火れつゐの勢いきほひ、言捨こと座ざを立
大鵬たいほうの一舉いっしよ九万里きゅうばんり計はかりあき、心こころの奢せがりいつとあき暫しばしに曇くもる薄雲うすぐもの、王
子みこよ引添ひきぞ犬淵いぬぶちの方丈ほうじやうさして入いりよける、春更はるまて、風かぜも薫かほるや振袖ふりそでよ、どめ木
が誘さそふは所育しよいく道春公みちはるこうの秘藏ひざう娘むすめ、桂姫かづねと名付なをし、年としのいざよふ月の顔かほ幾
夜よか、一人ひとりおもひ寐ねの心こころのたけを清水しみづの一木ひとこのかけよ、姫こしもとが、敷毛氈しきもうせんの色いろ

るよき、女中同士のあまめかし、爰は陰陽の頭阿倍の恭成が弟采女の助
恭清大小さしも立派の若者櫻が元はあゆみ寄夫と見るより慇懃は是
は是の姫様存じがけないは參詣殊天氣快晴て木々の葉櫻は遊
覽も一入の慰みと、挨拶すれば桂姫兼て心をかけまくもさし向ふては
今更は顔の上氣の櫛もみぢ穂あらるゝ物としを、必共のもどかしく
申采女様、は姫様があの様は言兼あさるも無理じやない、は前様は首
だけで、是程送つた状みよつゝるは一度の返しもない故、何でもけふの色
よい返事いやでも應でもかぶせやならぬ、しげみ殿、それは斯
出合たが百年め、取付引付おつしやれと、突やられてもも玄く、とだく
つく胸を押まづめ皆の者がいふ通り妹や母様の目顔を忍び、千束のみ
返り言さへ長の夜は、泣明したる磯千鳥、是程思ふは胸欲あつれないわ
いのと寄添て、恨涙は五月雨は露うく野邊の、かほは花風もまるは風

情あり、采女の助ももて餘し、是に又迷惑^{めいわく}千万、又まても拙者をおおぶり
有^あきとふり切袂^{きわもと}、袖をひかへて、そりや余りぢや、胴欲^{どうよく}な、殿御^{たんのり}も惚^ほたとい
ふ事を姫ごせの身で恥かしい、噺^{はな}か誠^{まこと}に此通りと、采女の助が差添^{さしぞへ}を扱
取給へば、一興^{いっけい}、御短氣^{たんき}ああぶあやと、姫はしたとり、よ、よ、あだめい
さむる折こそ有、思ひがけあき犬淵源藏、下部引連おどり出、主人王子の
云付故此所又待請た、姫を渡せば其通り、左なくバ儂^{なま}も此刀、其首筋へひ
やひやく、つめたい目をせふよりの、すあほも置て立歸れとかみ付
やう^{のし}又罵つたり、采女の助つと出、まほらしいうんざいめら、主^おも劣
らぬやま犬淵皮引ばいでほへづらかくさん、お姫様を裏道^{うらみち}から早ふ
早ふも吞込で、そんならお先へお供せう、跡から随分お早ふと、皆付添
姫君の、館をさして歸らるゝ、そふいさせぬと犬淵が、欠出すゑりがみ引
掴^{つか}み何の苦^くもあ、頭轉^{づつ}例^{れい}、遁^{のが}さぬと家來共受てかゝるを刎^{はね}倒し、向ふ

て來るを引寄て、大地へどつさり後から、むまやふり付をふりほどき、前へくるりと、米俵よねたわら、二段返しや三段四段、五段の例れいの段平物、はげ敷手並なみだも尾をふつて、逸出す犬淵いぬぶち下部共、コリヤ叶のねとかけ出すをあとを、またふて「およてゆく

道春館の段

思ねひ寐ゆめの、夢ゆめの間枕まきも契ちぎる、明あきがたや、琴ことのまらべの初花姫はつはなひめ、ぬ共ともようたりせて、ひく爪音つまねの氣高けだかさよ、右大臣道春公みぎのちじんみちのぶこうの夏座敷なつざしき、松吹風まつふきかぜも一まほよいと、涼すずしさ増まるらん折まふし一間騒さむらいがしく走り出たる桂姫けいひめのふ采女さいによ之助すけの何國なにくにへぞ、是こゝのふくと取付とて、そあたりの妹いもうとの初花はつはな、耻はかしやと袖覆そでほひ胸むねあでおろす計はかりあり、初花姫はつはなひめの不審顔ふしんがほ、姉あね上げた、ましい今いまのお聲こゑ、こゝい夢ゆめでもほらふじたか、お氣いきもじわるふいないかへど、介抱かいほうすれば面おもてはゆげよ、そあたの手前てのまへも面目めんもくあり、さつきよ母様ははさまが旅行りょこうの戀こゝろと

いふ題を給はりしゆへすまんと思ひしよ、何やかや心もつれ案じわづらふおしまづきもたれかゝりしうたも寐も采女之助と只ふたり宇治の川邊をそこ爰と、賤の手業も打ながめ、苦を敷寐のかち枕、嬉しい夢を見たのいのだ、咄し給へバ、姉共どふでうん事かして此お汗の出た事、いのど、つどの乱れも櫛入て、いたなりやせバ初花姫、此頃にくよくくと、どふやらお顔の色もわるい、其様よきなノと思し召おえつらひでも出やうかど、案じらるゝと姉思ひ、手を取かひす姉妹の、中ぞ床しき大内育、かゝる折から入来る安倍の安清、几帳のこあたまたゝすみて、後室様よりお召よよつて只今參上致したりたうお取次と云入る、聲も飛立かつら姫、姉はした立さのぎ、そぞやこそ、今のがは出たど、さゝめさあへバ、姉様、自り采女之助の見へた事おえらせやさん皆こちへと、心さかして立て行、まだうら若き初花の、やがて其身も懸さかり、ほのめさざか

りの姫共引つれ奥へ入跡、入問待兼かつら姫逢たかつたど走り寄、縫
り給へばふり放し、ト聲が高いお姫様、委細さいの存じ有通り、皇子わうじの方よ
り毎度の催促さいそく、は入内じゆ有ば双方無事又治る浪風、もしは得心とくしんあき時ときの後
室様のは身の上、爰をよふ辨わかへて、拙者が事ことの思ひあきらめ下されよと
いふ顔つれ、ト打守りうちまもり、そとやあんまりじや曲まががあい、今更いふも耻
かしぢながら、北野詣での折から又思ひ初たが身の因果、ほん又寐た間の
夢ゆめよさへこがれ、憧こがるゝ戀こひしさは、逆も叶かなひざ思ひ切忘りよと思や、思ふ
程猶忘られぬ、女子の因果いんぐわ、夫おとこ又引かへ胸欲むねほち、むとわいのと一筋ひとすぢ、思
ひ誥ことたる娘氣の譯わけもなまめくうらみ泣、折まふし次の一間いっけん、花はなもうし
嵐あらしもつらし諸共もろとも散ちばどさそふさそへばどちると、古歌を吟する母の
聲こゑ、ト思ひし姫よりも采女さいによ之助のすけの氣きをあせり、扱あり様子を存ぞんか見付ら
れて、互たがひの難義なんぎ、まづく奥へと押おやられ是非せひあくるも入給ふ、時し

も襖押明て、館やかたの後室こうしつ萩の方、まどやかみ座し給へば、采女之助両手をつき、憚あはりながらは前様は安泰たいの躰を拜し、恐悦けうえつ至極しきく仕る、シテ今日お召の様子は用いかゞと窺うかがへば、奥口見廻し萩の方、近ふくくと小聲こゑなり、そきたも兼てまゑる通り、先祖を傳つたへりし獅子王の劔、何者の仕業しわざや盗み取て行方ゆくええれず、此事禁庭きんていへ聞へおは藤原の家にもつしゆ、もしもの事が有たなら、草葉の夫へ云譯いんぎおくとやせん斯やと自が、身又つゞまりし今の難義、便りといふのをまた衆兄弟、力と成てよき様も、思案を頼たのむ恭清きよひらと世ままみくと聞ゆれば、采女之助頭を下、委細うゑさい承知仕る、我々が爲なは主人同前の道春公、いかで疎畧そりやくを存すべき、天をかけり地をくゞつて隠る共、草を分つて尋ね出しは手を入ん案の内、は氣遣ひ遊ばすなと力を付る折こそ有、皇子様々の上使とまらせの聲、聞て采女にいぶかる面色、は臺たいの眉まゆをしめ給ひ、皇子様より上使とぬ姫を入内の鑑かみ

侂なもん、自よきと計らひん、まだ咄したい事も有、采女之助の、奥へと、
仰ふ否む色目なく然らば後刻と夕間暮禮義の厚き式臺と心を奥と次
の間へ立別れてぞ、入相時、早夕陽も傾きて、無常を告る鐘の音もいとど、
淋しき黄昏や間毎を照らす銀燭の光り、まばゆき白書院程も有せず入
來る鷺塚金藤次秀國、素袍の肩肘いかつげ、上座よこそ押直る、斯と
しらせと館の後室衣紋正しく出迎ひ、上使様よの苦勞千萬、皇子様
よりは誼の趣、仰聞られ下さりませと、辭讓の詞よ一楫し、上意の次第餘
の義又有ず、皇子兼は懇望有し獅子王の劔、今日中よさし上るか、さあ
くは娘桂姫が首討て渡さるか、二ツ又一ツのは返答只今仰聞られよ
う、存宏がけなきは難題、その劔の紛失致し、所方と尋れ共今よか
いて行方去れず、今暫くのは用捨を、そりやあらぬ、皇子御心をかけ
られしかつら姫、度く催促有といへ共どやかくといひ延し打捨置る

る事、貴族の威勢よぶきよ似たりと以ての外御憤り、劔がなくば桂姫、首
よしてお渡しなされとのつ引させぬ釘鎧胸よひつしと萩の方途方涙
よくれ給ふ後よ始終桂姫、こあたの間よ初花が忍んで様子立聞ども
えらず御臺の涙をばらひ、迎も手詰よある上、いづれ遁れぬ娘が命、味
線の中事ながら、一通り聞てたべ、過去給ふ夫道春夫婦の中よ子なきを愁
ひ、清水のほどりなる三神の社へ立願込三七日の参籠、其歸るさに産子
の泣聲、肌よ添しぬ雌龍の銚形よし有人の胤あらん、神の御告と連歸り
育上しぬ桂姫、間もかく設し、初花、右と左よ月花と詠め暮せし、姉妹を、
是非よ一人ぬない命、殺さよやならぬ品とあり、せめて夫がましまさば、
問談合も有ふ物、何をいふても身一つよかゝる憂目も前生の報ひか罪
か悲しやど、身を悔みたる御涙と、め、兼て予見へけるが、思案きめり
顔を上、杖柱とも思ふ姉妹、勝り劣りなけれ共、劔で殺さば三神への恐れ

といひ、殊ことは義理有姉娘爰の道理を汲分くみて、妹妹の初花をかゝり又立て給
らば、此上もなき御情と、言せも果す聲荒らげ、スリヤ三神の咎め
恐れ、神の此末の王子の仰御用ひりあされぬか、よしろれぬも有、上意を
受た某も、身がかりなどしと思ひも寄す、無益むやくの問答もんたふ聞耳持ぬ、只今と
誥寄ていつかなひるまぬ其顔色、叶ぬ所と胸をすへ、のふは上使武
士の物の哀をしるといふ自が一ツの願ひに、此双六盤、二人の命を天
道の差圖さずに任せ、負まけたる方の首討くちせめて、夫を定業じやうごうとあきらめらる
る事も有、とふぞ此義を了簡れうけん、慈悲じじや情じやじや、聞分きてと義理と恩愛
二筋に又、つたふ涙の雨やさめ身みふりかゝるか、つら姫母の情の有難がたさ
お慈悲じといふも口ごもる、振の袂たもと、えらさめのはれ間まり更さら見へざり
き、エ、エのよまい言、見物するもまどろしけれど、何とせう是非
がない、さりくどお始めあされ、勝負かの付がすぐは寂滅じやく、成程なく、そ

れと明さば女氣の歎きも心かきくもり、取乱して詮もあしたゞ余所あ
がら暇乞、一思ひよといひさして詞あつくくとり出す用意の櫛四隅よ
り立る櫛の一本も、露を待間やかけらふの、哀れはかあき有様を几帳の
影も采女之助、かゝる難義も我故と、思へど出るも出られぬ時宜千々
よ心を苦しめる思ひ、同じ母親が、是が冥途の使かと、思へばいとさせ
さのぼす胸の子故の五月闌あるめも分ぬくもど聲、娘とて呼出す、アと
返事も一やうよ、斯とい誰も白小袖死出の曠着と姉妹が、姿も對の雪柳、
しほれ出たる屠所の道羊のあゆみたどくと最期の、座よぞ押直る、一
目見るも萩の方扱の様子を聞しかど、先を取れて今更よ、どかういらへ
も涙ある、母の歎もかき曇る心は月の桂姫、漸も顔を上、委細の様子にさ
つきよから、残らず聞ておりました、時はあれし郭公子で子よ有ぬ自を、
此年月の御養育、まだ其上よ妹迄自を助けんとさまの心づかひ、思

ひ廻せば廻す程空恐ろしい身の冥加胸よせまつて一言もお禮の口へ
は出ぬのいなでこんかうき目を見せまそも皆自が徒から迎も叶ぬ戀
故と覺悟のきめめておりました露ちり御恩を送りもせず先立まそる
不孝の罪お赦しなされて下さりませ産の父上母様のことよとして
ござるやら命の際また一目あふて死たい顔見たい是斗がと云さし
て聲くもらせば初花姫のふ曲もない其のお詞たどへいづれの胤あり
共わらのが爲よの大事の姉様お前の殺さぬ自をのふそもじの赤が
らへて使すくない母うへよお宮仕へを頼むぞや自をわらいと、死
を争ひし姉妹の心根不便と母親のいづれをそれとわけ兼る胸の涙の
三つ瀬川身も浮計歎きしが、さあらぬ躰よのふ娘は上使への馳走よ、
日頃手練の双六をば目よかきや、一世一度の曠藝なれば、二人共よ大事
よかけどちらも負てたもん赤やどわつての云ぬ親心かたへの盤を引

寄て、是が此世の別れかど、思へば直そ手もたゆくかゝる例もあや錦袋の紐をどくくど、さいの河原を、此世から積石數もおどいの、年も重自よ持涙互よ筒を取かひし、指手引手も端手あらず、切つきられつ修羅道の、苦しみ受ん悲しやど、思へば筒も手もふるひえどろもどろの石づかひ姉をかへぬ姉を、助けん物ど双方が、重一壹六五二四三果しあければ氣をいらち、と、埒の明ぬ長詮義、早く勝負を付めされ、早く早くと鷲塚がせがみ立れば姉妹も爰ぞ一生懸命と心づくしの盤の面、母の胸迄つゝかくる涙呑込く、て背ける顔も露時雨、こい目をふりし姉よりも妹が心の嬉しさくるしさ、姉様がお勝なされたど、首さし延て覺悟の躰、見るよ母親保ち兼わつと計よ、伏えつむ、刀すらりと金藤次勝負の見へた觀念と、ひらめく稻妻姉姫の首の前へよぞ落よけるよ悲しやど初花姫、あへさきからよ取付て悲歎の、涙果しなき、泣目をは

らひ萩の方上使の傍そばは詰つめ寄よて、ヤア狼ろう狼ろうたか金藤治、勝負しょうぶは勝かた姉娘あねむすめ、おぜ切
たおせ殺ころした、それとさどつて身がみなりと初花はつはなが心ざし、水の泡うぶと成た
のも皆其方が無得心むとくしん、たばかりられたが口惜くちやくいと、身を震ふるひして腹立はらだ立た涙、上
見ぬ驚塚おどろつかせゝら笑わらひ、ハハ、しやらくさい咎とがめ立、勝負しょうぶは勝かた勝かた、い
仰おほを受た桂姫きぎめ、首討くびうちたが何誤あやまり、皇子みこの御心ごこころ背そむく、傍かた、悪わるく身動みぶき召よるしとど
いつこいつの用捨しやひ致いたさぬ、すつ込こでお居ゐやれと、權威いを甲かは傍若無人ぼうじやくにん
ふり袖引裂そでひき首押くびおし包かみ、よらみちらして立出たる、は臺たいのくつとせき上給あ
ひ、ヤア過言あやまり金藤治女きんとうぢめと思おもひ侮あはつての雜言ざごん不禮ふれい、右大臣みぎのちじん道春みちのはるが妻つまうこ
動うごくなど、裾引上すそひき長押ながおしの長刀ながた追取おて石突いしつてうと庭にわの面おもて、八双はつそう三段さん水車みづぐるま、母
様さまは何事なにこととどいめ隔へつる初花はつはな姫ひめ、邪魔じゃま仕しやんおと突退つぎのひ劔けんのけ、すくふ
長刀ながたひらりとかわりし、ちよこさい腕立うでたと、首くびをかたへは驚塚おどろつかが秘術ひじゆつを
つくす上段かみだん下段しもだん、運うんの極ごくめか金藤治きんとうぢ肩かたさき四五寸四五寸切下きりくだられ思おもはず跡あとへ

たぢくく、付入刃むね蹴落され是のどかけ寄は臺のよの腰どうと
 打付動かせず、采女是よと飛で出、拔手も見せず驚塚が脇腹ぐつと突込
 白刃、急所の痛手よどつかど座す、おこしも立す聲あらへげ、皇子に詔ひ
 悪事をそしめ、人を損ふ獄卒め思ひまれやと刀の鞘えぐるかて首まつ
 かどおさへし、まて采女早まるな、言殘す子細有、此期も及んで何云譯
 血迷ふたか金藤治、血迷ひもせずおくれもせぬ、先暫くと押とめ、苦
 しき息をほつとつき、元某の東國武士下野の國那須野の何某、故有て所
 領も離れ、當地へ立越さまよふ中女房が初産、うみ落したの女子の子、涙
 涙の身の悲しは雌龍の鍬形相そへて五條坂のほとりよすてしが、程な
 く妻も世を去てうき年月を送りし内、思はず皇子の見出しよ預り當家
 も傳ひる獅子王の劔、盗み取て得させなば、一簾の侍も取立んどの頼み、
 へ、畏つたと忍び入、奪ひ取たの、此驚塚、は驚きの尤欲も目がくれ

悪人の皇子よまたがひ積悪無道のほど邪見の心よも忘れがたき恩
愛の捨じ娘のいかゞすと、案じ煩ふ折も折、最前（前）は臺のは物語り聞た時
の其嬉じさ、肉身のお子よかへ、かばひ給へるお慈悲心、有がたしとも嬉
じ共、何と詞の有べきぞ、須彌より高きは厚恩万が一も報せずして、えら
ぬ事と、ハ云ながらお家よあだする人であし、たどへ鬼畜の身よもせよ
初花姫のは首よ何と乃があてられん、お手よかゞつて相果るのせめて
心の云譯ぞと、先非をくゆる身の懺悔、扱へと計母娘采女之助立寄て、
其御劔の御遍が所持せらるし、獅子王の劔内侍所諸共、玉子の
館よ隠し有ハ、術をもつて取かへされよ、斯物語れば劔の盜賊、いづれ
も立寄て御成敗（せいばい）なされよと、よろほひし首取上、（首）娘、（娘）爺（爺）やのやい
く、なせ物いふてにくれぬぞと、ねふれる如き死顔を打守りく、今端
よ成て二親をこがれたふた心根が、いぢらしやら不便をやら、其時名

乘り安けれ共、恩義の二字よからまれて、つとこたゆる辛抱しんぼうの、熱鉄ねつてつを
のむ心地ぞや、燒野の雉子夜の鶴子を、あられまぬの、あきと聞、あたら甚
を、胴欲みどりよ首打落し、手がら顔むごい親芝やと、冥途めいどから恨ん事の可愛かほいや
と、我を忘れし男泣、心を察し、萩の方あやも、涙よ正躰せいどうなく、一樹いちじゆの影かげの雨
やどり一河の、あがれをくむ人も、深いゑよしと、聞物を、藁の上からそだ
て上、手まほよかけた親芝や物か、いゆふなふて何とせう、十七年の春秋
が一期の夢で有たかど、返らぬ事をくどき立か、こち給へば初花も、俱よ
涙よむせかへり、あはんあま夕部も今朝迄も、かふした事が有ふどの、神さら
ぬ身の情さい、なんぼ捨てても子じやないかな、せ自を切あんだ、今から誰
とついまりや、琴のさらへや十種しゆか香も、手向の種と成たかと、聲も惜まを
叫び泣、采女も遠愛着と、義理のまがらみ、恩愛の血筋の別れ、鷺塚が、鬼を
あざむく、兩眼よたばしる、涙はらくく、四人が涙一時よ落て流るゝ、

袖の海膝ひざも淵ひらあすこどくなり、かゝる折しも勅使と呼よひる聲諸共中納言重之卿衣紋正しく入給へば、思ひがけなく人々の敬うやまつひ、請こじ奉る重之優美ゆうびのは聲こゑよて、曾頃そうかう禁庭きんていよて哥合せの折から、息女初花姫よりさし上られし讀哥よみか、みさび江えの底の玉藻たまもの乱みだる共、まらるあ人ひとも深き心をと有しを、帝みかど獻感けんかんな、めあらず、は賞美しょうびの餘り女官の列りも相くわへ玉藻たまもの前と改めて、召つれ來るべしとの勅しやく誼ぎ、ヤく仕丁共、云付たる品早く持もつといらへて白臺しろたいも更衣かろいの裝束しやうそくうやく、敷しきは前まへもさし出せば、はつと親子おやこの有難涙ありがたなみ、辭ことするの恐れと母親がとりく、着きする五ごツ衣ぎぬ、綾羅錦繡あやのりやうら きんしゆひ緋ひの袴はかま芙蓉ふようのかんはせたをやめの、あたりまばゆき其粧よそはひ、采女さいによ之助のすけのつゝ立上り、我われの是こゝより姫が首皇子の館やかたへ持參もぢさんして、虛實きよじつをもつては劔けんを奪うばひかへして奉らん早はやおさらばと、立出る、コレのふ暫しばししと母親が、首くびも名殘なごりの唱名なうなのそぐは黄泉よみの道みちしるべ、道の案内と鷲塚じゆづかが、刀やいばをぬけばがつくり

ともろくも枯るゝ芭蕉葉の、露の玉藻もうるほふ袖しぼり兼たる朝日
の袂、雲井のほ所や九重の大内、山へとわかれゆく

第四 神泉苑の段

平安城の大内裏築地の内よ散敷る、木々の紅葉の紅ひを、一つ所にかき
寄る、箒さらへの跡迄も、是ぞ都の錦なる、符符の仕丁が寄たかり、何と平
作此神泉苑といふ所の物すとい小氣味のわるい所ぞやの、ま、そりや知
た事いの、此池よ龍神が居る、いやい、何といやる、龍神が居る、其龍
神といふ仁のどんか仁じやぞいの、ま、甚太平我も嗜め、龍神といふ物の
蛇躰ぞやの、いやい、昔あの池で小野の小町が雨乞よ、とりや日の本あれ
ば照もせめ、去迎り又天が下とり、といふ哥を詠まじやつたら三日三夜
さが問えだらでん、奇瑞の有池ぞやの、いやいとしかつべらしき講釋を、
聞て、こなたの鞠れ顔、そんなら小町といふわろが、ことりやと哥を詠

で雨をふらすと、チモマゝゑらい幻妻げんさいじやあ、こちらの唄うためり雨乞あめごでのかい、
借錢しやく乞ごといつでもことりやとやりかけるけれど、雨あめのふらいで火が
降ふるりどふした物じやあ、夫おとこのどふでも陽氣やうきの高ぶる丙午ひのへまでがな有ふ予
い、恐ろじやの丙午ひのへま、夫おとこのそふと此間こゝの帝様ていさまのは腦のう玄げんやといふて、は
所の内うちのひそくとかんと鳥とり、は腦のうといふの上様うへさまが舞までも廻まつゑやる
のかいの、そりやお能のう玄げんや、は腦のうといふのは病氣びやうきの事こと玄げんや、はい、
此頃こゝろ玉藻たまも様さまといふお后ごうがね入いりあされて、間まもなふ悪いの何病なにびやう玄げんやぞい
の、は其その病氣びやうきのは大和錦たいわにしきんじや、何なにじや大和錦たいわにしきん、は色いろの病びやうが有あり、は二疊ふたじよう
臺たいの疊たひのへりじやといふ事ことじや、はこいつのよふやりをつた、はえたが玉
藻もの精分せいぶんの藥いす玄げんや、はい、何をそりや玉子たまごじや、はどふでもは寢所ねどころでと
ぢ付つてふりく、はえやつた物ものであら、こちらこちらも晚ばんよりの山やまの神茶碗かみちわん蒸むの
むしかへし、あたゝまらふと夕間暮ゆふまぐり、はさらへを打うかたげ、玉敷庭たまぢにわのろこ

爰は木の間に清め居る、折からさつと一陣の深山にさしよさその
れて吹來る魔風砂を飛し、黒雲空よ立覆ひ目ざすもまらぬ闇夜の内に、
顯りれ出し老狐の形ち眼に日月電光の、ひかりよわつと仕丁共かしこ
へどうと倒れ伏神通自在の伴の妖怪木よの葉隠れ逸散よ、神泉苑のみ
ぎわの方底はかどなくかけり行く、九重の南面よは溝の水よつゞきた
る、神泉苑の池水よ、浮む玉藻の前後うつ姿にさながらよ月の面かけ、
雪のはだ花の粧ひたをやかよ、此世の人どの見へざりき、嬉しや化粧
負せし我姿、是れ直よ夜の正殿へ入込で、帝の正腦もいつもの時刻、そよ
おやくと身づくろひ、正殿の方へあゆみ行、後の方よ聲有て、玉藻の前
暫しくと呼とめ、立出給ふ薄雲の皇子、姫の後を返り見て、誰と思へ
ば皇子様、わらひをどめ給ひし、いかなる仰の有やらん、玉藻、い
か成仰どの曲があい、そなたをふつと思ひ初度よみよてくどけ共、否應

の返事もせぬの余りつれない爰であふたが是幸ひ是非にくと有け
れば、イヤヤ皇子様、自を誰と思し召、當今鳥羽の院の后と定まる玉藻の前、
くどき給ふの不義邪、其邪合点、うまたの姉の桂姫兼て心をかけし所
承引せういんあきゆへ金藤治きんとうぢも付首討せたり、又そあたの當今鳥羽の院が招
き入て宮女きやうやとあす、朕まろが始て見た所姉あねも増りし其器量きりやう、忽ち懸暴けんぱうの思ひ
まえづむ丸まるの兼く、弟宮あにみやうも位くらゐを奪うばひ、無念骨隨むねつづいも徹てつしたれば、鳥羽の
院いんを遠嶋えんたうさせ、王位わうゐも昇のぼらん我望われぞろみ、そあたさへ心こゝろも從したがひ、直ただも皇后女
御様ごさま、隨したがひ給へど寄添よそて、くどく姿すがたの鬼おにあざみ、玉薄たまうすの前まへの顔打守り、今お
つまやつたお詞ことばが、私が爲なす百千ひゃくせんの誓紙せいしも増まさる御言ごごんの葉は、必違かならずへ給ふ
あど、膝ひざも寄添よそその姿すがた、露つゆを含くみし姫百合ひめひゃくあひの、風かぜももつる、風情ふうじやうあり、うつ
つたわいもあき王子おうじ、ハテ知た事こと、弟天皇あにてんかうを退退しりぞけ丸まるの天子てんしそもじの
皇妃かうひ、淪言りんげんの汗あせのごとし、再びふたたびかへらぬ我叛逆わがはんぎやくちつ共違ともちがひのあいわいの

と、本心明す皇子の詞、とつくと聞て玉藻の前、袖打はらひ氣色を糺し、其
本心を聞上りわらひが望もお聞せやさん、元自り人間おらず、天地開闢
の始より億万歳を經し、狐三千世界を魔道よあさんと、大竺よてり班足
王の後花陽夫人と化じ、唐土よてり殷の紂王の後姐己とあり、又今此日
本よて玉藻の前と變じたり、君は謀叛の心有り、我神通の魔法をもつて
お力と成奉らん、其かたりより自が一ツの願ひも叶へてたべど、頼む詞
よ薄雲皇子、驚きあがら動ぜぬ魂、其方り人間おらず、丸が力よならん
どの頼もしく、其願ひどのいか成譯包ず語れど有ければ、有が
たき御仰、願ひといふの外ならず、事成就せば此日本、神道佛道破却して、
魔道を立て玉なるべし、願ひといふは一つと、逐一聞て打うなづき、云
まや及ぶ、夫こそ我兼て望む所、天皇をぼつ下さば御裳川の宗廟を打
こぼち、佛もたゝらよ燒亡し、神社佛閣破却あさん、ちつ共氣遣ひ致すあ

と、受がふ詞嬉しげふ、只神國を滅せんよ神の正鉢八咫の鏡、是を穢さ
ば魔界とやらん、我三國を邊歴して神通自在に得たれ共、只恐るるに獅
子王といふ名劔、支那國普明も妨られ本意を達する事あたはず、今日の
本も傳來して、又もや害を赤さんかど、心がより一ツと、聞か皇子の
何のく、兼て王位を望みし故とくも奪ひかくし置、百虫の血汐をもつ
て鏡を穢さば世に常闇、又獅子王の名劔も我手も有る心の儘、有難や
忝や其劔こそ神道の徳を失ふ魔道の仇爰も有て行ひがたし、何卒五
畿内の地を遠ざけて、邊土の土地も捨給へ、然らば其義の兎も角も何
かの咄しの奥殿まで、こなたへ來れど先も立、日本の天魔異國の邪神、神
の正末の紫の庭ふみまたく緋の袴引つれば殿へ伴ひ行、木影も窺ふ美
福門院、あまたの后立出給ひ、いづれも今のを聞遊べしたか、皇子
様の御謀叛、何事も密も聞き捨あらぬ一大事と、互もささやき

黠頭合跡をまたひて后達神泉苑の木隠れも窺ひく追て行

廊下の段

金瓊の床の前より遙く千歳の松を契り玉室の臺の上より遠き齡を万
歳の龜も期す君の寵愛限りなき玉藻の前が琴の音も月卿雲客それど
も管敷の樂の澄渡る夜の御遊ぞ面白きされハ宮中三千の女郎達にい
つしかは帝の寵愛おとろへて獨局も捨られしあやめかづらき千歳の
前對の屋の廊下よつとひ寄のふ千歳様何と思し召玉藻の前が后と成
君の御心も叶ひ日よも増ての御寵愛妬ましいぢやあいかいあ、菅浦
様のおつぎやる通り、こちらにとんと見かへられ龍顔拜する事さへさら
ず、まんきで暮す局の内どふぞ仕様の有まいか、それく私ら逆も同
じ事、よくてらしい玉藻の前、帝様のお傍を遠ざける、仕様の局で言合
ふ、皆くこちへ來給へと恨妬みの上も、かいらぬ胸の板敷を、打連か

しこへ入給ふ、思ひよのひさげの水も湯と成ど、古き例を今更ふ、皇后美
福門院の君の敵慮も増花よ見かへられつゝうつろひて、月の曇れる面
影よ、打まはれつゝ、立出給ひ、夜の御殿を詠めやり、世も恨めしき玉藻
の前入内せしより此かたの君の寵愛浅からず、其いよしへわらひも
も比翼連理の詔り、かわいらぬ契りと思ひしよ、いつしか秋の風立て、獨
りさびしき閨の内、涙の袖を敷たへの枕、一つの物思ひ、いつそ此身を打
捨て、猛火と成て此恨、ばらさん物ど、思へ共、君よ心が引されて、輪廻よ
迷ふてゐるのいのふと、恨み涙よ紅ひの、十二ひとへも緋の袴膝よ淵お
し泣給ふ、斯と見るを后達、ひそく奥を立いで給ひ、門院様夫よましま
すかど、いふよこあたも顔を上げ、葛城千とせ菖蒲の前、最前々の様子を、
是よて残らず聞ました、只うらめしい玉藻の前君のお傍を退ける、
あまた様のお心いど、尋ねよ門院制し給ひ、こ聲が高い最前ひそかに

神泉苑にて見聞し様子、正しくあれの人間ならず、化生の者と極れば災
ひを赤さんもしれず、左の云赤がら武士をかたらふ時の君へもれ返つ
てわらひが身の災ひ、いづれも力を合せ給ひ、今宵爰に忍び居て夜の
は殿へ通ふ所、皆く一度又立出て、玉藻の前を刺殺さんいかよくと
のたまへば、菖蒲かづらき千歳も俱又我も迎も同じ事すさめられたる
口惜さ、恨みをはらすの今宵の内、帝の御身國家の爲心弱くて叶ふまじ、
女でころあれ日頃の恨み、やにか仕損じ有べきと、常又艶しき女臍もね
たみの劔とぎ立し、錦の袋とり出し、銘く用意なし給へば、門院大き又悦
び給ひ、頼もしき各々の御心底、必ず悟られ給ふかとひそく、忍ぶ長廊
下窺ひ居るが、恐ろしき、清涼殿の遊の宴樂、半と成、時こそ有頃しも
秋の始めて、月も入さの山の端、雲の氣色もすさましくうち時雨ふる
風、つれ、は殿の燈し火一度にさへかへ燈しをとすくひる聲く、玉藻

の前まへのゆうくと粧よそぎふ姿せま嬋娟せんけんとあやあき闇やみのくらきよも通とほひ馴なたる
長廊ちやうちやう下か、あやぶむ氣色きしきも有ありて、まづくは殿とのへあゆみ行ゆ待まちまふけた
る后達ごうたつ、火ひの消きたるの天あまのあたへ、只ただ一刀いちとうは刺通さしさんと、さぐり來きる前後
ろ、既すでに斯ごとよと見みへたる所ところよ、ふじきや玉藻たまもが全身ぜんしんより放はなつ光明月くわうめつよひ
としく、内裏ないりの庭ていは照渡てりり、黒戸萩くろとの戸と一面いっぺんは夜の錦にしきどかきやげり、はつ
と驚おどろく后達ごうたつ恐れわななき猶豫たゆらいしに怪あやしかりける、次第しだいなり

十作住家の段

下野しものや、那須野なすのの原はらよ、つゞきたる、立野たちのの郷ごうは住馴すまし十作じゅうさくといふ親仁おきな有あり
元もとのよし有あり武士ぶしおれと主人しゅじんの暇給ひまたまりて、今の世過よとりますら男おとこの心こころを
すぐよ野山のやま狩鹿かひの卷筆まきふでする墨すみの獵師りやうしとこそいふえられけれ、娘むすめおやあひ
此頃このときより怪あやしき姿せまかげよそひ物の怪けといふ病やまめて、心こころづかひ予まるせ
なき近所きんじよの友連ともづ嬰は嬰かが、門口かどぐちから音ねづれて、十作じゅうさく殿内とのうちよか、ね娘むすめの病氣やまの

とふでござる、やつぱり一人居ますかのど、わめけバ納戸を立出る、主十
作ほれくど、是調ハ深切しんせつハ忝かたじけなくい、聞つゑやる通り、娘が體からだが二ツ調成て、物
の云やうも風俗ふうぞくもどちらがそふじや、らとんどわからぬ、こまつた物
でないかいのと聞て皆く横手を打、うりやかいつた事じやのふ、そん
な病が有る物かど、いへばさし出る五郎作後家、有調げあ、陰かげの病やまひと
いふ物で、おんばこの二股またでくすべるとえれるげな、夫をえて見やしや
れど、聞て傳三調が、いやく、夫おつとつてつきり狐きつねか狸ねこ青松葉あおまつばか線香屑せんかうくずでくすべ
たら、えれるいの、何なにをいやるやら、そんな事ことでいく事ことあら、こつちよ
如在ちよとのちいわいの、いか様、一人の娘が二人に成たら、内の勝手勝手のよか
らふが、さし當つて世帯の物入、假令けれども米が安けりやこそ、其そのかゝりよ仙
臺たい錢せんの遣たれんわいの、そろくと逝いませふか、くござれど打つれて、
深切しんせつづくの見舞人まいても小氣味きみわるげよこそ、とまつげぬらして、立歸

る、跡又十作只ひとり、わたり詠むる折烏帽子、えら張の袖いかめしく、爰
らけきしの神道者、酒邊の樽彦仲人役、ども赤ひ、來たる黒鬘山の斧六と
いふ杣木こり、門口から免あれど、聲も高間がはらひする且那先とて
つゝと入、十作見るは、是の樽彦様よふござりましたの、今日六
齋日、籠ばらひも參つた次手、ふつと思ひ付た爰のお娘、ひとり置ふより
いと幸ひよい聲が有た故、すぐさま同道仕つた、聲殿爰へと呼こめ、
と返事もほくえやうなとてら布子も麻上下まふかみ、かづく手拭ひの
内、娘の内の爰かへおりやはづかしいとよそ目する、十作見るは
あきれあがら、樽彦様、は深切の段添ふござります、縁づくの事の
親のまゝもありませぬ、娘もどくといひ聞せ跡から返事いたしませう
と、聞て樽彦かぶりふり、それのわるい了簡とかく善い急げとサセ
は、すぐ又祝言さまやつたがよからふ、斯いへばどうか仲人口のやうあ

れど、取しやつて損そんのさい聲せう殿見らるゝ通り年若で達者たつしやつくど持まへの鉄炮てつぱうで穴をねらひ、随分お娘の氣入やうよ、のふ斧六、左様く、斯して参る上からは、何から何迄精出せいしゅつして、親仁さまも孝行かうぎやうをつくしませう、眞實の息子と思し召れて、宜しく頼むのあいさつも、おのが手の物木を切て、なげ出したるとどくなる、折から又もほう道より、速夜坊主たひやぼうしゆの道心者、鍋なべかけの釜藏ともあひて、頼みませうと門から案内案内、どあたおやこつちへはいらまやませ、然らば死しおじやと、つれ立還入はわか男、是も木綿きわたんのわた入にせんだく物の麻あさバかま、ぶらくさげた竹の苞つひ、手づから掘ほたじねんじよを、参つたしるしとさしいだせば十作じしやくのふしん顔かほ、や念才様、つゐに見おれぬ若い人、ありやとこの人でござりませぬ、されば、今日参つたに此人の事、つねからねんころお爰の内、お娘おむすめも相應あはれおよい花むこ、同道してまいつたから、一時も早ふ、しうげんさせてねち付

たい、さいわひけふの日がらもよし、は用意あされ下さり、ませど相のぶ
る、是（四）にえたり念才さま、どめつそうな人よ得心もさせずよ、おしつけわ
ぎのむこいり、つれていんで下さりませど、ちり灰（五）つかねば、それ
わるい合点じや、思ひ立日を吉日といへば、早ふ盃（六）させたがよいと、香こ
み顔の取持よ、神道者のむつと顔（七）、よくけづり廻し、づくようめ、さい
せんから聞て居れば、仲人じやの、むこ入じやのど、出家の身として不
埒（八）千万爰の娘の聲（九）がね、此樽彦仲人仕て爰よ居る、そちらの聲（十）のきり
きりと、まくり出して仕廻はつえやれと、聞て念才むくりをよやし、
そこなはらひたまへめ、おのれが何ぼふ仲人顔えても、此坊主の先祖代
代からの逮（十一）夜得意位牌所の絶ぬやう、愚僧（十二）が仲人よ小言のあい、そちら
のむこ殿きりく、いんでもらひふど、詞の尾よつく釜藏（十三）が、坊様がい
んえやる通り、此むこいりを仕くえつて、友だち中へつらが立ぬ、そふ

おもふてもらひふかいと、腰すへかゝれば、こなたの髻こむぎ、おもしろい、そ
つちが顔を立るあら、たれも一番腕うでづくて、此祝言いひのまて見まよひい、ま
そふじやく、其腰押こしの此樽彦こし、此念こころ才さいもまり持もと袈裟けさ木綿もめんだすきか
あぐりすて、つかみかゝらん有あさまよ、十作じゅうさく双方ふたうおしますめ、くふたり
どもよふ聞きしやれ、どちらを髻こむぎ取とふも、肝心かんじんの娘むすめが二人ふたりよありまし
たわいの、ま何なにじや娘むすめがふたりよなつた、そんなら髻こむぎ二人ふたりよ丁ちやうどよいじ
やあいかいの、まそれが人間にんげんなりやよけれど、どちらぞひとりひとりの化物かぶつで
ござるのいと、聞きて二人ふたりの、ま、く、そりやかゝらぬとあきれる仲人ななめ、二
人の髻こむぎのちつどもくつせず、面白おもしろい、ま、たどへ化物かぶつもせよ、此斧この六むが
正躰ただあらひし、髻こむぎ又また成なて見せるぞよ、此釜藏このがてめ上あさせ、ほんまのお
娘むすめと祝言いひする、ま、おれも是こゝから奥おくへいて、お娘むすめの容体ようたい見て置おふと、まぢり込
だる押付おしか髻こむぎ、肩かたふりちらして入いりけり、二人ふたりの仲人ななめのこま顔かほ何なにと坊ぼく、

たとへのふしの宵の程、もふそろく、と逝ふじやないか、それよふと
ざらふ、禰殿ござれど、ゆふだすき、輪袈裟そこ、どりちがへ、かんでん
しんそん南無阿彌陀、打つれ我家へ立歸る、十作跡をうちちがめ、こま
つたぬし達、二人の娘よこりた上、又二人のむこい何事じや何とせうし
よ事があひ、難義な事とつぶやきて納戸へこそい入よけり冬の日あし
も、傾きてかすかよひ、く入相よ、哀をそふる片山家、黄昏時を物さびし
納戸の内を立出る、娘お籙が二人の姿、且よわたり見廻して、ほんよまわ
さつきにから奥で聞て居れば、聳よあらふの何のかのあたいやらしい
と、つぶやけば、こなたも同じ不興顔、人の心を知もせず、祝言せふとあつ
かましい、是と云も大六様、内へ戻つて下さんせず、しんきあ事と、た
ばこ益煙管持手よくゆらす、煙も同じ富士淺間、此まあ夫の今比の何
所よどうして居さんする、こがるしわしが心根を、思ひやりもない事か、

聞へぬいの大六様、むごい男と諸共、かこち涙や、月の顔、うつす、鏡が
水や空、そらや水やと詠むれど、わかちかねたる斗へ、こがるゝ思ひ通じ
けんお築が夫大六、三年以前、在所を出、大臣家、仕へしが、主人道春
は、最期より、浪人の身の憂旅、日數重ねて、東路や、我故郷、立歸り、様子
親ふ舅の門口、お築、見るより、こちの人、大六様よ、ふまゐ戻つて下さ
んしたと、いふも一時、いろく、と、悦ぶも、又同じ事、女房共、そなたも無
事で親父様も達者か、随分達者よと、ごんする、それ、目出たいそ
ふして、そちらの女中、あまや何所のお人、なやといひつゝ、顔を打守り
そなたがお築、女房共、何をきよろゝ、云々、やんすな
んぼ、久しうあぬ、とて、女房の顔見、忘れてか、見忘れのせぬが、そん
ら、あちら、誰ぞや、いと、さろく、見やりて、つぱり、こちが女房、な
や、と、ふ、狼狽て、居た事と、あまたを、ねめて、きたを見やり、と、ふ、なや、面
肌

から髪のかざり、着物帯の色合迄、寸分違ひぬ二人の女房、こゝろ、いか
よと鞠れ果暫し詞もなかりける、右と左よ二人の女房、聞へませぬ大
六様、お前とわたしが其中の隣在所で思ひ初、あんな男を持たないと、氏神
様へ願かけた、念が届いてふしぎの縁結び合たるいもせ中、よもや忘れ
いさんすまいといへば、おあたも取絶り、物がたいと、様のお目を忍ん
でさしめ言とふかかふらと案せしを、仲立入て世間晴悦ぶ間も、おふ内を
出風の便も音信も泣てこがるし心根を、思ひやりも、おい事かど、かこて
ば、おあたも引よせて、久ぶりよて我内へ、戻りおがらも女房の顔見忘れ
るとい水くさい、聞へぬいなと一筋よ、男一人よ二人の女、妬む形、お
文字を、かくやと見へよけり、大六二人を突のけて、最前から見る所形と
言物云といづれか、ならぬ二人の女房、是非一人の變化の業、おふがな
と思案の内納戸を出る眞十作、御殿、よふまお戻つて下さつた、是れ

親父様、私も奉公の望有て長く、と他國の住居、留主の間の何角のお世話、もふ何の世話といふたどて我内の事、こあたも内を出てもふ三年餘り、便音信あいま付、おれの元々娘めの毎日、待て斗、それのそふと今迄どこも居やまやつたふいのふ、されば此在所を出しより上方へ登り、堂上方へ有付右大臣道春公へ、何道春公へ仕へた、道春公、まそりやまあよい主取をさつまやつたのふそふして又何故も戻まやつた、其義の、うちと子細有て浪人致し久しぶりみて古郷へ歸つて見れば女房が、まだら、まふした譯と尋れば、さればいの、合点のいかぬ一通り、聞て下され、もふ跡の月の事有たが、那須野が原へ獵も出て、あちこちと狩あるき見付出した、古狐焼の眞白毛の金色、尾の九つまわれた股、何でもこいつよい得物と、手覺へのどがり矢ねらひすまして射た所筈をかへして矢の飛ちる、南無三寶と二の矢をつがふ内、天窓の上を飛こ

へてくさむらへいつさん走り、何でも爰じやと草を分てさがしたら、大きな穴が有、此中又あると違ひのあいど、堀穿つて見た所が、犬や兎の骨ばつかり、形のかいくれ見へぬ故、えやう事あしよ内へ戻つたれば、娘のお築の如くいつの間もやら體が二つ、する事もいふ事もどんど瓜二つ、コイヤ何でも狐めが業じや引とらへと思へ共、どちらが娘やら狐やらどふ考へてもどんど分らぬ、こあたの目も分らぬかこまつた物ど、始終の様子語るを聞いて大六が、今のお咄し聞え付思ひ當りし事こそ有、此頃都の取沙汰よ、三國を傳來せし金毛九尾の狐、東國よ徘徊し、又内裏よ入込で障碍をあすと安瀬の泰成が考、其狐こそ件の悪獸女房よ仇なすの奇怪至極二人の内よ一人の必定狐に極れば、討て捨るが万人の助け、そふ然やと刀するりと拔放せば、くくこちの人わたしのお前の女房じや、あれこそ狐打給へ、くくそふいふからんそなたが狐、そ

あなたが、^{イヤ}そちがどいづれあやなく見へければ、さしもの夫もあぐみ果
暫し、思案よくれけるが氣を取直して、^マそれよ、^アたとへ一人の妻よもせ
よ、國家の爲よいかへられじ、二人ともよ手よかくる、必恨と思ふあど、又
振上る刃の下左右の袖よ取縫り^{すが}、情あき心やあ、お前も今の武士の
身で狐の業を見あらぬ、^{てたて}術よ盡て科もなき女房を殺そとい、いかよ氣
づよきお心と恨めばこなたもかきくとき、死る此身のいどのねと跡よ
殘てど、^{おん}椽の軌の程が思ひれて、いとしいわいあど諸共よ、落す涙や恩
愛よ^{あひ}刃もあまる斗へ、十作涙押拭ひ、二人共殺そといふ、^ア簪殿も尤玄や、^{こが}科
なき娘も又不便な、刃の下を恐ぬ^{おそれ}悪獸^{あくじ}めつたよ正躰の顯ひすまい、いかさ
ま眞殿のやさるゝ通り、^{じんつう}神通得たる古狐、一通りでのあらぬすまい、^{おん}實
それよ、^{それがししよち}某所持したる主君よ預りし^き奇代^{たひ}の名劔此劔の威徳よて、^{おん}若顯^{わかし}の
るし事もあらぬ、いでや劔の徳を見んと、錦の袋取出し、^{ひも}紐とくく^とと拔^{ぬき}

放せば、劔の光り忽たちまちふ、恐れわなしく一人の女赦させ給へあらくるしや
我わがこそ三國傳來せし、金毛九尾きゅうびの狐きつねあり、其劔こそ天竺てんしやくよて獅子王ししおうと号なづ
し名劔、又もや爰にて我神通、くぢかれたるか口惜やと、怒いかれる眼まなこも身を
ふるひし、立さらんとする所を、大六透すかさず刃やいばの下、細首すくねはつしと打落せ
ば十作驚おどろき立寄て、調其劔が獅子王とやいかよも、是こそ主君道春の家
も傳へし獅子王の名劔、ハハ工くわんだり拵しらたり右大臣道春が最期さいごより、紛ま
失せし獅子王の劔、汝なんじが所持しよぢするいひれをし、最前さいぜんそちが歸りし時、道春
公へ奉ほう公こうと云し節、何故古郷へ歸りしと、尋ぬれど返答こたへせせ、扱とひ劔の詮
議ぎに來りしと、某が思ふよ違ちがひす、贖物あはせの劔よて、狐と正躰せいとくあらんせし、其
女も合点がてんが行ぬ、あざとい工たくみと嘲笑あざわらへば、ハハスりヤ、此劔の贖物成か、おんでも
ない事こと、忝ちがいしく、コレコレくく龜菊殿かめぎくどの、そあたの働女房はたらきが一命を捨し故、劔の
有所知たるぞ、スリヤ、今そちが手よかけしひ、娘むすめお築やなで有たるか、いかよも

劔の有所を見出さん爲、是成女の津の國の傾城、龜菊とす者、お梁よ面鉢
似たる故、女房と心を合させ、狐の障碍と見せたるに、こゝあたの所存を探
らん爲、それ迄もなく問は落すして語るよ落ると、今某が所持の劔を贖
物と見極られしに、そつちよ誠の名劔を、隠し置れしは證據、サア舅殿、誠の
獅子王尋常よ、お渡し有と語寄バ、サアいにして置ば様、のたの言、劔を
隠せし覺のあい、サア覺あいどの比怯のふるまい、先達て安瀬の泰成が考
し所、此邊りよ奇雲立事、是全く劔の徳然るよ此度金毛九尾の野干退治、
三浦之助上總之助兩人よ、勅命下るとすせ共、彼が神通をくじくよ、獅
子王の劔あくて叶はず、然るよ兄宮薄雲の王子御謀叛有て八咫の御鏡
獅子王の劔奪ひ取て隠し給ふ、是を詮義なす所、は劔都よあらざれば、察す
る所我舅の王子の舊臣、那須の八郎宗重あれバ、預り有よ相違あし、サア期
明白よ顯れし上り、最早遁れぬ王子の荷膽人、那須の八郎宗重殿、早く劔

を渡されよと星をさいたる一言も、宗重いかりの聲あらはしげ、推量の
上の蘊むも及ばず、某こそこの當國の領主たりし、那須の八郎宗重なれ共、
元より王子も一味もあさず、劔を隠し置たるおんど、跡方もなきたり言
疑心をいだしき太切の、娘が首を討たるぶ骨、聲どいひのさぬ娘の敵と、傍
も有合山刀引さげて立かゝれば、大六もつこと打笑ひ、髻のよしみだ
け劔を渡さば助んと思ひしよ、刃向ひ立の事おかしと、刀も手をかけ双
方も、くくくと詰寄所も、ばつしと羽ひきき宗重が、左右の脇も立たる
矢先痛手もどつかど、尻居も座し、何やつなれば名乗もかけず、比怯の
振舞はへ出よと喚ひれば、王子が叛逆も合躰せし那須の八郎宗重も
三浦之助義明上總之助廣常見參せんと、奥口一度も押開き、以前の若者花
花しく、初めかゝる狩装束弓矢携へ立出て、兩將手負も打向ひ、我も兩人
勅を請東國も下るといへ共、獅子王の劔おき内の魔道をくじく術なく、

矢田の大六と心を合せ、入聲と偽り此家に入込、密な様子を窺ふ所、宗重が本心の聲を討れん志と見抜し故に宗重殿、不便ながらも手もかけしが、とても遁れぬ王子の味方、恨と思ひを尋道に、刃を渡し召れよと仁義を守る若者の實も東の両助と名を聞へたる勇士に、手負の苦しき息をつき、是非もあき世の成行、愚逆不道と知ながら主命を随ひて、謀叛も一味あせしより、死る覺悟の極めしが、一人娘を迷ひ、仇も月日を送りしよ、いかゞ夫の願ひて主人へ忠義といひあがら、不便の最期をとげけるぞや、まかし心得がたきところらの女中、最前聲殿の詞の津の國の傾城龜菊といわれしが、しや江口の里明石の刀自といふ、老女を育られいせなんだか、其明石の刀自といふのわたしがかゝ様、うんあちやつぱりれれが娘、お築が爲の兄弟じやいやい、と恟り龜菊より、大六も又驚きて猶も様子を聞居たる、つい期斗での合点がいくまい、面

跡あとから音聲おんせい迄いた似たこそ道理、お築たけとい同じ月日又生れた双子ふたご、生落うますと母ははの死しる、世間の手前てまへ隠かくさんと江口の里の刀やいば自みづかが元もとへ、密ひそま道みちのし一生不通つうつう、娘むすめよさへもしらさず、廿余年が其間、無事むじでゐるかど朝夕あすけに、案あはじこがれてくらしせしよ、此間このまから傍わき又居ゐながら、現在げんざい我子わがことしらすして、化生けしやうの者と心得こころえてえたし、詞ことばもかひさばころ、今端いまはの際きわ又名乗合なまのりあひ、娘むすめか親おやかど只一度、いふたが直ただ又此世の別わかれ、薄うすき契ちぎりも日頃ひぐらから、鳥獸ちゆうぶつを殺ころしたる報うらひか罪つみか淺あはましやど、親の歎なげき又龜菊かめぎくも、始はじめて聞きた私わたしが身の上みんじやう、眞實まことのとい様の有あとい兼かみて聞きたれど、お名もか顔かほもじらぬ故ゆゑ、長の日數ながひかずをお傍わき又居ゐて、露斗つゆとある孝行かうかうも盡つくさぬのみか畜生ちゆうじやうの業わざとて親おやをたばかりて心づらひをさせました、誠まことの狐きつね又劣せつりたる不孝ふかうの罪つみの恐おそろしや、ただそれよりもお築たけ様一つ所ところ又有あながら、姉あねよ妹いもうとと名乗なまのりもせず、顔かほの見みあがら現あらなく化生けしやうの業わざの何事なにごとぞ、廿の上迄ふたじゅうのうへ迄いたまらあんだ、とい様さまや、姉あねさまよ、あふ

と其儘死別れ、はかない事が有ふかどとき立く、歎き、沈めば大六も
舅殿（舅）を謀らんと頼來りし龜菊が、現在（げんざい）女房の兄弟とい存じよらざる今
のお咄し、取分不便（ふべん）の女房お築、夫婦の契りも暫しめて、長し他國も引き
別れたましく、戻ると無骸の頼、親を欺く偽りも夫の爲と思ひ誥、狐と名
乗手よかしく、健氣（けんけい）の最期とげしる、男よまさりし忠臣貞女（ていせいよ）、でかしおつた
と譽る程、父（ちち）の猶しも身もよもあられず、日頃（ひぐら）から此親を大切にする孝
行（かうぎょう）者、今端の際（はし）は親と子の暇（いとま）をさへ得せず、狐と名乗死んだ身（み）、いか
成過去（なりゆき）の終末（すま）まで、未來の程が思ひる、忠義といへど此親が悪人（あくにん）は荷
膽人（おんたんにん）せし、天の咎（とが）が我子（わがこ）を報ひ、むさんの最期（さいご）のいぢらしや、こらへてく
れよ、娘（むすめ）、コレと、戀、聲殿、舅殿、不便（ふべん）の事をまじしたと、三人が首に手をか
けて歎くを見るよ、兩將も思ひやつたる俱涙、名よわふ那須（なす）の玄の原よ
あられ、たばしる如くあり、や、有て兩將の、涙をばらひ手負（ておほ）よ向ひ、は

と後悔召る上り、お築が存念思ひやり、は劔渡し、潔くは最期有とす、
むれは、思ひも寄ず、一旦主君は頼まれて預る劔の有りとて、いかで敵
は渡すべき去ながら死だ娘の追善と、夫成娘へ今生の置土産と、譲り與
ふる物有と、よろぼい、神柳の内は納し刀の袋うやく、しく取出し
是こそ手馴し山刀、熊猪を仕留し名作、獅子王の劔といふ共おさく、是
は勝るべき、長き未來の籠ぞと、それといいで手は渡す、心の謎をとく
とくと、寶劔取て押いたゞき、兩將は奉れば、忝しく、は劔は手は入
から、那須野の野干退治より聞捨難き王子が叛逆、露顯の上り都は登
り、禁庭へ奏問とげ、一味のやつ原討取んと勇立れば、手負の這寄、斯は劔
もは手は渡る上から、頼て王子の運命つき、は身の大事とならん時、は
兩將の執成めて助命の程を頼入、氣遣ひせられ、天理は背く王子が
悪逆、ついに擒と成迎も我々が、乞請て命の助け參らせん、心置れず成佛

有とすもむるも又、義心の功、大六も涙をばらひ、眞殿の情もては、刃返進
有上り、最早浮世も用なき某、忠義と探り親と子の最期の別れも善知識
無常を觀じて菩提も入んど、髻ふつとと押切て、是れ我名も、玄翁法師と
改名し、諸國修行も趣かん、又それある龜菊の父の亡骸野邊送り、中陰佛
事を營て頓て都へ登るべし、さらばく、と立出る、適と寄特の發心、イテ
打立んと兩將が、すゝんで出る都路や、手負の今ふだんまつま、親子つれ
立ち終の道、冥途の旅の、門出や跡も、まほるゝ龜さくの尾花が袖や露涙、
那須野が原の草の葉も元の、車と、成よけり

第五 訴訟の段

李延年が詩よ、北方よ佳人有、絶世よして獨立そ一度、願れば人の城を傾
ふたゝび願れば人の國を傾るとかや、帝此頃御惱と稱し大殿をもちりな
し給へば、御兄宮薄雲の王子政を執行、江口の遊君龜菊を、宮中よ招き入、

色におぼれて、公事行事怠り給ふぞ是非もなき、女郎達寄こぞり、うの
葉、王子様の此間、みあせの御遊よお出さされ、お傾城の龜菊殿がお目
よとまり、御殿へ連てお歸りあされ、夜晝あししの御寵愛傾城の仕こあし
といふ者の、さやうといものでりあいかいの、さればいのあの傾城が、ど
れ程お氣又入たやら夜り、御寐所晝り御酒宴政事さへお構あくきつゝい事
じやととり、の嚙半へ奥殿方、里の姿を其儘よ媚く松の位山、御殿造
りも揚先と、おめる色あき龜菊が、酒よ乱るゝ千鳥足、そこに居るのり誰
様ぞや、私一人を酔して置て、お手の悪いといふ中よ、奥御殿方薄雲の王
子まづ、よ歩み出、くかめ菊、紅葉山の詠も興盡たれば、又爰で酒よ
せよ、盃持と褥の上、傍み引寄のふ龜菊、此程の遊覽よそあたをつれて
立歸りしより、三千の宮女迎も目よ付者の一人もあひ、まろが心よ叶ふ
上の百官百司よ披露して、女御更衣とあがむへし、何と憎ふ有まいがど

いと餘念あまのこころあき詔みことり、其お詞ことばの嬉うれしけれど、かゝり安やすき男おとこの心こころ、つゝいふの
り氣きな増ま花はなも、悪いせりふをさんしたら、わまや聞きんぞとひんとすね、是
の又またきつゝい疑うたがひ斯か成なり上うへの何なにの其その、四よ海うみの掟おきて政まつりごとも、とかくそもじの心任こころまかせ、
まゝく何なにぼら其その様さまよいいなまやんしても合あ点てんが行いぬ、其お詞ことばも違ちがひあくべ、
お前の慥まこと赤あか心中こころが、ま、心中こころ合あ点てん、我われ王わう位ゐの望のぞ有ありて奪うばひ置おたる八や咫たの儀かぎ、
ろもじも預あづか置りからいかんらぬといふ慥まこと赤あか證しやうこ據こ、ろんから此こゝに鏡かがみとやら
をあの私わたしも下くださんすか、せいもん嬉うれしふござんすと、請こゝろ納める其所ところへ、ま申まを
王子おうじ様さま、先まづ程ほど陰かげ陽やうの頭かみ安あ瀨せの安あ成なり殿どの、玉たま藻もの前まへもふしんの趣おもむき、又また龜かめ菊きくさま
まお尋たず申まをたい義ぎ有あり決けつ斷だんあし給たまはるべしとの願ねがひ、まだ其外そのほかも此間こゝか
の公く事じ訴そ訟せう今日けふも築つ地ちの中なかも相あ語ご居ゐられます、いかゞ致いたしませふと、尋たず
ま王子おうじの打うらなづき、幸あま龜かめ菊きくも政まつりごと事じを任まかす手て始はま、訴そ訟せう共ともを捌さばかせん、
心任こころまかせま決けつ斷だんせよと座ざを立たて入い給たまふ、公く卿けい武ぶ官くわんの公く事じ訴そ訟せう、傾かた城じやう遊ゆう女にょ

の取捌前代未聞の事へける、仰を請て職上へ、龜菊憚る所なく、吸付煙草
長ぎせる、公沙汰も媚かし、ツレもじ野けふの訴訟のおさん方、皆呼出しや
アイど返事も長廊下禿がなれし呼聲又、玉しく庭の訴訟人懷紙くはひしもあらぬ願
ひ書、み階間近くさし出せば禿が取て讀上る、龜菊様子をどつくと聞、願
ひ人の丁箇内侍のお局相人の持兼の宰相様、こやお局様がれあし貸かあま
したのじやあ、れ前もよい年してちつど嗜たしななませ、人又貸かたああしを戻
せといふ様も無理な事が有物かい、ななせといひあませ、宰相様も無心い
ふお客きやくでもありや、借りや仕なませんわいあ、それじやよよつて出来る
迄待て上なさんすか、それがいやあ、帳消けしあされそれでさつぱり次
どはでな捌さばきよお局の、ああしも取ず帳消けしれぶつく、つぶやき扣へ居
る、次へのつえり立出る、は元の中納言諸足卿相人の衛符ゑふの仕丁又作、白丁
の袖まくしゑぼし横長よこながようつくまゐる、お前の願の何でおます、早ふいふ

て見ませと、詞かざり冠傾かたむけて、まろが昨日きのうの黄昏たそがれ時、参内の歸るさま築垣ついききの
邊ほとりよてあれなる下主みか、お神酒みきたべ酔よまろが沓くつよてかれが足あし踏ふしどや
ら、又よじりしどやら、身み覺へあきぬれ衣着ぎぬせ、束帶そとのゑりえめ上あて頬ほ
打たゝきなせしゆへ冠かむ下かが、頭痛づら八百戯そいり慮りをもつて糺明きりし、まろが恨うらを
はらしてたべ願ねがひの斯かど有ありけれ、そんから行合ゆきあは喧嘩けんかせなましたの
ぢやな、予まめきのお方は何なにぼふも有事うじ、こちらの白丁はくぢ襟えもかんぺきらし
い顔付かおづぢや、もふかんよんして上あなませ、まかられたら夜よが寐ねよいじ
やないかいぢや、又氣きが濟すんど思おもひなますあら、酒さけでも買かつて中直なかつり、何なにどお
二人ふたり様さま此こゝ捌はいとふじやいぢや、聞きて又また作つく笑わら壺つぼよ入いり、コリヤこりやきよといお捌はい申ま
諸足もろあし様さま、此こゝ公事こうじの互あよ五步ごふ、是こゝから奥おくの御殿ごてんへいて小半こなぐつと引ひか
けふと、味あじい事こと共ともいひちらし、奥庭おくにわさして入いり、次の願ねがひいかゞぞ
と、見みやる向むかふへとつしりと、二入ふたひも過あり品形かたちずつとお末すえのおはした女むすめ、

相人よ取た右大辨面目なげよ居さらべり、女中様、お前の願ひも云な
ませど、どのれて顔よ袖おほひ、私が願ひを爰でいふのかへ、耻かし
といふ形にぞつととする程いやらまじ、それでんと譯がしれぬ、い
ひしやんせとせつかれて、今さらいふも耻かしながら、去年の初春廊下
口、じつとお前が裸身で、腰付とらへいちやくと願ひ叶へてくれぬか
ど、いやがる者をむりやりよ紫震殿の階の元へ、押付へし付、耻かしと
顔かくす、そふして其跡のどふじやいあ、いりいでも知れた事それからよ
こく廊下の出合、其おどもりがお胎残り、もう七月でござんする、れろ
しも流しも成物か、それよ今さら退ふと、むごいつれあ、胸欲と我身
をどつさり右大辨が膝よ打伏しやくり泣、こあたも道理と脊な撫さを
り、ほんよやれく、戀程切成物のあし、ついちよこくと重るゑよし、情
の數もおこどが身よ、三つの上り四つ五六、早七月と聞上り、さらよ詞も

絶せし有様、只此上の御前跡、宜敷捌給のれかしと冠も落ん斗なり、龜菊
ふかしさ押かくし、公家様の手が悪い、身持も成たらぬ事がない、藝
子様も有からひ、揚語もすまや物が入、金で仕切て仕廻んせと皆それ
ぞれも片付て粹を捌、手を合せ嬉しさ形もいとひあく、咄しの残り
又後も廊下で必頼予へど、尻目づかひのいやらしさ尻ふりちらして出
て行

祈の段

程あく跡へ入來る陰陽の頭安瀬の泰成、えぼし狩衣かいつくろい階の、
元も平伏す、こゝたのほ簾か上げさせ、玉藻の前いたをやかみ、粧ひかさ
り立出て、殿上も座し給へば、龜菊の會釋して、安瀬の泰成殿、玉藻の前も
尋たい様子どの願ひ、何事かゝらね共、決斷して正せよどの王子様の仰
ふ泰成殿、お前のふしんの趣を、直もか尋ずさんせと、差圖も泰成頭を下、

有がたきほ仰ふしんどやの余の義あらず、此程帝の腦よて大殿
ごもりなし給ふ、是全く宮中へ妖魔の有てなす業あり、早く是を退け給
へど、奏問すれ共玉藻の前、さへぎつて是をこぼむ、其心底のいかゞぞと、
尋ふ玉藻の笑をふくみ、人の病の器成妖魔の業との事おかし、其妖魔と
何をさして、其其妖魔こそ外おらささいふ、汝玉藻の前、何此玉藻の
前を妖魔とや、自らの化生あらず、右大臣道春が娘、素性正しき帝の宮
女、それでも化生といふべきや、すべて化生といふもの、人間の陰氣
よつれ、皮肉の間へ分入て障碍をあす、汝の正しく三國傳來、金毛九尾の
狐其證據の過し比清涼殿よては遊の時、は殿のともしび一度よきへ、物
のあやめもわからじよ、門院始官女達、前後よりねらひ寄、其時汝が全身
より光りを放ち、殿中の晝のごとく輝きしが、是ぞ慥な證據なり、返答
有やと詰よれば、おのまわ仰山お泰成の詞、身が光を放ちしを化生の者

といふふあら、昔允恭天皇のれ后の、身玉の如く光輝き、衣の上迄通りし故、衣通姫と名づけ給ふ、又聖武帝のお后の光明輝き給ふ故、光明皇后と申奉る、光りを放つが化生あら、光明皇后衣通姫も化生の者といふべきか、左程の事を辨へず陰陽司の心元ない、返答任や、さしもの泰成一句も亦く口を、つぐんで居たりける、龜菊始終とつくと聞、適粹亦玉藻様、今のせりふで承知仕ました、氣の毒ながら泰成様の負公事、立まらんせ、お次へいて茶でも吞で逝まらんせと、立んとすれば先と暫らく、恐れ亦がら今一應、臣が願ひを御聞届けど、といむる詞も立留り、まだせりふが残つたかへ、もふよしよさんせいで、笑止亦お方での有りのふ、捨置がたき帝の御腦、平愈の爲も泰山符君、御殿もかいて修行致さん、玉藻の前を幣取の役も命じ給ひらば、有がたからんと願ふもぞ、そぞりや悪かちふら、玉藻の前も忝くも帝様のお后、外の女中よさまらんせとい

へば泰成イハく占ウラナヒの秘法ヒホウよて相尅サウキョクの女メよて印インおし、玉藻タマモの前マエに相生サイセイな
れば、ひらよお願ガネひやたいと、詞コトよ是非シゼイなく、玉藻タマモ様サマとふしませよへ、帝
のお爲ためと有あからぬ、いなみやも恐れ有あ、自役ミヤクを相勤サウキンん、それなきついで、お慮ウレ
外ほかじや、が頼たのまれた私も立た、そんなら用意ヨウイさまやんせと、勅命テツメイ下れば、泰成
の悦うれびいさみ退出シュツトと、玉藻タマモの前マエにまづくと御簾ミヤレ、深くぞ入給イリタマフよ、跡あとよ、
一人ひとり龜菊カメキクが、何か思おもひの有あぞ共とも、いさ白砂シロコの、木隠キカクレれよ忍しのび出でたる采女ウツメ之
助すけ、それと見るより聲こゑをひそめ、兄あに泰成イハの差圖サズよよつて、どく方かた是こゝよ窺うかがふ
某その、玉藻タマモの首尾しゆびのあんどさればいさ、疑うたがひもあき王子おうじ様のさま玉謀たま反門はんもん院いん
様さまのお頼たのゆへ、色いろよ事寄ことよたばかつて、奪うばひかへえた八咫やづらひの御鏡みかぐり龍りゆうのあざ
どの玉たまの得とる共とも、又またも得とがたき此神鏡片しんきんぺん時ときも早はやふと取出と出し、渡わたせば取とて
押おいたいき、玉謀たま叛露はんろ顯けんの上うへおれ共とも、當今あきまの兄宮あにみやなれば、あち立てぬ事ことの
破やぶれと種々しゆじゆよ心こゝろをつくせし所取ところかへされし、龜菊カメキク殿だん、適あたのお働はたらき、君きみよも

さ予やは悦び、万事の後刻と懐中し、立別れんとする所、いつの間、かの薄雲の王子、よつくさやつ原遣さじと、切付給へば龜菊の王子のは手
又縫り付、コレ、采女様、爰構はずと、此鏡を、早ふく、又泰清の逸足出し
てかけり行、跡、王子の齒ざし、み齒切、思へば無念と、龜菊が、髻、擱でぐつ
どねち付、万客、肌をふれ、恥を恥共思ひぬ、賣女我寵愛の恩を忘れ、仇で
かへそ人畜生、思ひ知やと、龜菊が、あばらをぐつと、椽板へ、ぬい付給ふ、怒
りの刃先、えぐりくるしき息の下、のふは尤でござります、は尤でござり
ます、いのふ、元わらひ、は家來の、那須の八郎宗重が娘、生れ落ると父
母、又別れ、江口の里、人と成、けふよ翌と過せし内、父宗重が末期の一
句、何卒君を善心よと、門院様もは頼、君をたばかりは寶を、奪取たるおま
くし、み、お腹いせよ、此體、一分だめしか竹鋸、いか成苦痛もいとふまじ
は心をひるがへし善心よ成てたべ、頼するといふ聲もせぐり苦しき息

づかひ心ぞ思ひやられたり、聞たくもあひよまい言、うぬら如きが千
万人異見諫を聞べきや、望も任せ成敗の、まづ此通りと肩先脊中、情用捨
も荒氣の王子、非道の刃もはかなくも、此世の息のたへまけり、折しも奥
の檀上も不淨を拂ふ、鈴の音、樂またぐへて喧く、人や、見んかど龜菊が、死
骸をかしこへ蹴飛す不敵奥殿、深くぞ入まける、陰陽の頭安瀬の泰成、願
ひまよつて、禁中も檀を構へ、秘法の燈燭供物を備へ檀上まの玉藻の前、
大幣取て立給へば、泰成是も打向ひ、泰山府君を、行ひける庭上まの皇子
を始月卿雲客居あらびて靈驗今やと守り居る、檀上も玉藻の前いかよ
泰成、汝帝の御腦平愈の祈と偽、誠の自を化生どなさんどはかる事よく
知たり、行法の力有べ、我正躰を顯ひし見よと欺る詞も安瀬の泰成、い
ふもや及ぶ、立所も名劍の威徳を以て、妖魔の姿を顯ひさんど、腰も帶せ
し獅子王の劍を拔べ忽も、あたり鳴動稻光り、檀上ある玉藻の前、憤怒の

姿を顯ひして、無念むねんや、推量すいりやうの通り我こそ三國傳來の狐あり、右大臣道春が娘、玉藻の前を取殺し、姿をかりて内裏だいりへ入込、王子の謀反むはんは合がっ躰たい此日の本を魔界まがいよなさんと思しよ、神國の威いは押れ又また、劔の徳とくよよつて、我魔道まだうをくじかれしか、口惜くしやくやあたへ都を去迎きよむかひも、再び那須野の原はらよ趣おもむきて、人民みんを腦なまこさんと、一聲いっせいあつと叫こゑぶと見へしが、金毛九尾の狐と變へんじ虚空こくうをさして飛去とびば、泰成持たる大幣おほなまきを、はたどなぐれば舞上り跡あとをまたふて、追おて行、王子見るより飛とで出、我叛逆わがはんぎやくの片腕かたうでと思ひしよ玉藻の前たまもの前、内裏だいりを立たさる此上こゝへ、一味の公卿こうけいをかたらひて、花はなは數軍せん、者共用意しよんぎょういと有ありければ、忽たちまちひらく金鼓きんこの音ね乱調らんてうよ打立うちたてく、三浦之助義明上總さむらいのすけよしみかみ之助廣常、官軍引連庭上くわんぐんひきつらぎよ大音上おほねかみ、王子おうじの御謀ごまう叛露顯はんろけんの上うへへ、我われは討手うちてよ向むかふたり覺悟かくごくど喚こゑひれば、小こえやくある燕雀えんせつ共とも、此上こゝへ天皇始はじめ公卿こうけいの奴原ぬら、一ひと引ひさき捨すらんせと、あれは荒あたる勢せいひよて殿中深く入

給へば、兩將つゝひてかけ入んとする所よ、采女之助御鏡携入來り、龜菊が
貞節ていせつよて御寶みたま再び手よ入上り、王子の一命を助け、四國の地へ遠流おんちゆうさせ
よとの勅命、又三浦之助上總之助の、片時も早く那須野よ趣おもむき野干やかん退治
をおすべしと、御劍神鏡みけんしんきやうさし出せば、兩人はつと領掌れいじやうし、有あがたき君の
勅諭ちやくごん、直ちよくよ此儘こゝろ發足はつそくし、不日ふじつよ野干やかんを退治たいぢせんと、官軍引連勇立那須野が
原へと、たつか弓

那須野の原の段

去程きよぢやうよ三浦之助義明上總よしあきみち之助廣常ひろつね、獵裝束かりしやうぞくの花やかみ、勅命ちやくめいを頭かぶよいた
だき夥多おほまたの官軍引つれて、那須野が原の四面かこませ、草をわかつて狩
立かる、されば金毛九尾きんもうきゆうびの狐神通自在じきんじざいの猛獸もうじゆうなれ共、獅子王ししおうの威徳いとくよくじ
かれて、其身を何と那須野の原、忍しのび隠かくる、隈くまもかく顯あらわれ出れば三浦
之助、弓と矢つがひ切て放す、矢先やの野干やかんのあばらへぬけ、どふと倒るゝ

其隙も、上總之助が手餘てあまめて咽のどをぐさど突通せば、あつと叫びて忽も、多年の妖魔も徒も、那須野の露ときへ失たり、兩將悦び勇立野干亡し此上の片時も早く上落し、帝へ奏問なすべしと、勝鬨かちどき上て凱陣がいじんし譽はまれを、世々も殘しける、那須野が原またつ石のく、苔も朽くちよし跡迄も、殘れる念も、恐ろしき、抑此殺生石と云ば、さいつ頃三浦上總の兩助が、勅命ていめいよよつて退治せし、三國傳來の狐爰こ又討れし其怨念おんねん石と變へんじて仇をあす、近付、人もとよりも地を走る獸も、空飛鳥の、翅迄忽爰たまたま又、倒れ伏、其骸骨がいかつのうづ高く、血汐ちしほ流れて池となり肉にくのつもりて岡と成、地獄のさまも斯やらんされ、玄翁法師げんそうほうし迎身を雲水の沙門有、俗性ぞくじやう矢田の大六と故有武士よて有けるが、親族しんぞくの別れより釋門しやくもんよ入て諸國修行し、殺生石を教まをれせんと爰けよ來つて石に向ひ、さとし玉ふぞ殊勝しゆしやう之、木石心もくせきしんなしとすせ共、草木國土きやくもくこくど悉皆成佛しつがいじやうぶつと開時ひらきときの又佛跡ぶつたあり、汝元來殺生石、何れの所ところ來り今生期けの

如くある、さうくもされく、と拂子を以て打玉へ、ふしぎや忽石中
も聲有て、石も精有、水も音有、風も大虚も渡る、形も亡び失たれ共魂残す
我こそ、三國傳來の狐なり、爰も亡びし一念の、人を取事數多かれ共、今あ
ひがたき法を請、惡念忽發起せり、只願ひく、今よりの稻荷の神とあ
がめ玉れば、五穀成就守るべし、返すくも僧の法を願ひ奉ると、く
れく願ひ石魂も、玄翁法師觀喜有善哉、汝が發起惡念消滅する上
の望もまかせ得さすべし、成佛せよと教化してみちびくのりの誓ひ
やくそくかたき一念の、石をくださし玄翁の智識の徳のいちじるく、未
の世迄もあつまぢの、那須野が原も名をのこす、殺生石の因縁を語りつ
たへて久しけれ

景事化粧殺生石

むかし雲の上わらひ、今魂のあまさがる、ひさも残りて、あくねんの、其

妄執まがしのはれやらぬ恨うらみの石いしよとゞまりて、乱れみだるゝいろく菊きくのま
べし休やすらふ花はなのもともときりくすそあたの足あしの細ほそくて長ながくてなせぎ
つくりまがつた、これこれでなければ、ちよいとはねてとまられぬ、うからく
と石垣いしがき町まちを通とおつたり、石いしの角かどでけつまづいて、ころくくころんで、つ
いたる、杖つゑが飛とちつて軒のき又また寐ねたる黒犬くろいぬ、白犬しろいぬ、まだらの犬いぬよあつて、わん
どいふておどした、で恟びつくりした、其ひやうし拍子ひやうしよ明ぬ目めなれば、常じやうやみどずて色
取坊主とりぼうずでござります、見みたいな、夢ゆめよ成共あひ逢あたや見みたや、夢ゆめよ成共あひわい
たや見みたや、夢ゆめようき名なのよもたしじ、山吹やまぶきや、勤つとめ又また實じつの有あがら、底そこよ
うつせし二面ふたおもてほん又また悪性あくせうの粹すいからおこる、腔うらそと思おもへば女氣おんなきの、ついだま
されて、うら紫むらさきの色いろ、紫むらさきやと浮名うきな立たちがらせのしい中の小こいさかい、死しな
ら死しねどかな書がきよ、よめるやうよの書かきもせず、苦くを、やますが樂たのしみか、憎にく
い男おとことたしいて、かんで心こころでさすり、泣なか笑わらふかしどけなりふり思おもへば、

まはづかしや山のはよ、入やく、月日のひかりもつよい秋もや、うすもみ
ぢ顔もいろあるやさ梅もみぢ戀のささけの下もみぢ、立田の川さみよ、
チアチア流るゝもみぢ葉の、谷のしみづよすそや小づまをぬらした、チアチア
立田の川浪よ、チアチア流るゝもみぢ葉の谷のしみづよすそや小づまを
ぬらした、チアチアおもしろや、佛も元の思のくのぼんのふの則ばたいの心ほだい
もすぐよぼんのふの、犬の聲く、恐ろしや、さどればすいと黒佛、くろい
くどおしやんすけれど、やつぱりやぼな床どいそぎ、だいてねはんの長
まくら、其むつことのゐすくの、七千よくのんのおさやうもん、ちんぶん
かんのこちやいやさ、そふじやへ、かねをたしいて、佛よあらバ、かんだ
かぢやまぢやみさくろ佛、なむおみどうふ、さむあみだ、ささいだ、くく、
させよお前は不稗ふなへ、稗すいもぶすいも、みなおしさめて、ねがへやねがへ
やのりのみぢ、まよひのくもをふきはらふ、つねさき風も如來にのしめし、

げようばたまのくろぼとげ、かたちひきへて、うせふけり、次のはりまのく
よのかたのらよすむ娘よてい、はりまがた、高砂たかまや、尾上おのへのまつひ高たかから
ず、下よすむい何やらん、つゆかまぐれか、戀人よぬれてあふ夜よの下ひも
もどいて給ひれ何ぞいさ、はだどはだどを、引まめて、其むつごとの中よ
よもふけた男おとこの子だからをだいて一さし、まひ子のはま、あどの國さへ
遠江とよくみ、きる物小づま高からげ、たすきをかたまさつどかけ、遠江とよくみあるく、
濱名はまなのはしの下、あるひい鯉こいか鮒ふなかはへの子かいかよなんじら、かりう
めくともく、まや、どつて、打あげ、かさをや、かさをさしかけて、てんく
てんひでりがさ、さしかけていざさらば、花見よ行んせよしの山、よほひ
櫻さくらの花がさ、えんと月日をめぐりくるくく、くるまがさそれくく、
そふじやへ、これがうき名なのはしとある、媚めいのよいおん女郎じやうらさまの、そバ
よねたれば、ゆきかまもかみぞれか、むらさめか、あられか、うんらがやう

玉藻前

寛延四辛未年正月十四日

玉藻前儀の袂終



明治廿五年七月十四日印刷
明治廿五年七月十八日出版

發行兼
翻刻者

日本橋區通四丁目四番地

內藤加我

印刷者

日本橋區新和泉町一番地

瀧川三代太郎

發兌

日本橋區通四丁目四番地

金櫻堂



名作三十六佳撰

出版既成目次

- 國姓爺合戰 全一冊
- 神靈矢口渡 全一冊
- 小野道風青柳硯 全一冊
- 箱根靈驗覽仇討 全一冊
- 太平記菊水の卷 全一冊
- 玉藻前議袂 全一冊
- 義經腰越狀 全一冊
- 義經千本櫻 全一冊
- 鎌倉三代記 全一冊

- 御所櫻堀川夜討 全一冊
- 傾城阿波の鳴門 全一冊
- 鐘ハト野カ淺草歟花雲佐倉曙 全一冊
- 卅三問堂平太郎祇園女御九重錦 全一冊
- 關取千兩幟 近刻
- ハ染久松新版歌祭文 近刻
- 蘆屋道滿大内鑑 近刻
- 局岩藤中老尾上加賀見山舊錦繪 近刻

名作三十六佳撰

出版既成目次

- 繪本太功記全一冊
- 生寫朝顏日記全一冊
- 假名手本忠臣藏全一冊
- 伽羅先代萩全一冊
- 武田信玄
長尾謙信本朝廿四孝全一冊
- 菅原傳授手習鑑全一冊
- 十三鐘
絹懸柳妹背山婦女庭訓全一冊
- 逆櫓松
矢箆梅平かゝ盛衰記全二冊
- 奥州安達原全一冊
- 一の谷嫩軍記全一冊
- 壇浦兜軍記全二冊
- 蝶花形名歌島臺全一冊
- 彦山權現誓助劔全一冊
- 伊賀越道中雙六全一冊
- 三日太平記全一冊
- 太平記忠臣講釋全二冊
- 花上野譽石碑全一冊
- 北條時賴記全一冊